



2017 年度 こめっこ講演会集



乳幼児期手話獲得支援事業

こめっこ



公益社団法人大阪聴力障害者協会（日本財団助成事業）
この事業は、「大阪府と公益社団法人大阪聴力障害者協会との大阪府手話言語
条例に基づく施策の推進に関する協定」に基づき、大阪府と連携・協力して、
実施するものです。

Supported by
日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

ごあいさつ

誕生からまもなく1年半を迎える「こめっこ」は、お陰さまで、子どもたちと
いっしょに元気に育っています。

この度、平成29年度に開催した「こめっこ講演会」の記録をまとめました。

講師にお招きした、南村洋子先生、木島照夫先生、武居渡先生は、それぞれのお立場から、長年のご経験に基づいて、手話との出会いの楽しさ、手話のある親子関係の大切さ、手話を共有できる仲間や先輩と過ごす意味、学習に生かせる手話の力などについて、丁寧に伝えてくださいました。お話をうかがって、私たちスタッフもたいへん勇気づけられました。

また、記録集作成に当たっては、お忙しい中、校正の労をおとりくださったことに心より感謝をお申し上げます。

当日は、多くのご家族に参加していただきましたが、ご都合があって参加できず残念に思われた方、内容をもう一度ふり返ってみたいと思っておられる方、理解の輪を広げたいと思っておられる方、そうした皆さまのお役に立てればと願っています。

今後もまた、すてきな「こめっこ講演」を企画したいと考えておりますので、ご期待ください。

どうぞよろしく願いいたします。

2018年8月末

「こめっこ」スーパーバイザー

河崎佳子

目次

「聴こえない子を育てて、今、思うこと」 ……P 2

講師 南村洋子先生

(東京都立大塚ろう学校講師・全国早期支援研究協議会会長)

**「自己肯定感を育て、ことばを育てる
-手話も日本語も-」 ……P23**

講師 木島照夫先生

(東京都大塚ろう学校早期相談員、全国早期支援研究協議会事務局長、
難聴児支援教材研究代表)

○スライド 1～24 ……P39

**「コミュニケーションから手話、そして読み書きへ」
……………P51**

講師 武居渡先生

(金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授)

「聴こえない子を育てて、今、思うこと」

講師:南村洋子先生

(東京都立大塚ろう学校講師・全国早期支援研究協議会会長)

南村洋子(みなみむら ひろこ)先生は、聴こえない娘さんを育てた経験を持ち、1980年より小林理学研究所補聴研究室「母と子の教室」の研究者、1993年より「聴覚障害児と共に歩む会トライアングル」の教育部主任として、20年間以上にわたって、聴覚口話法による乳幼児と親御さんへの指導・支援にかかわられました。その後、手話の重要性に気づき、2003年以降は活動の場を東京都立大塚ろう学校に移して、乳幼児期から手話を導入した早期支援に取り組んでこられました。早稲田大学、横浜国立大学等の非常勤講師を経て、現在は、大塚ろう学校講師、全国早期支援研究協議会会長としてご活躍です。聴こえない娘さんを育てられたお母さんとしての思い、早期指導・早期支援に携わってこられた道のり、今、保護者の皆さんへ伝えたいことなどをお話していただきます。

I. はじめに

みなさん、こんにちは。雨の中たくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。このような機会を頂き嬉しく思います。

今日は聴こえないお子さんの子育てについてお話をしたいと思います。

自己紹介と書いてありますが、河崎先生からお話しをしていただきましたので、大体のことはお分かりだと思いますが、私は二つの顔をもっております。一つは長い間教育に携わってきました。特に小さい0歳から就学前のお子さんの支援や親御さんに対する助言をしてまいりました。もう一つは娘が聴覚障害でろう者です。その子を育てた経験、母親という顔を持っています。この二つの顔を持ちながらここまでやってまいりました。

1. 親として

まず親として、70歳をとっくに過ぎていますが、今、いろんなことを思います。私が娘を育てた時のことを思い出すと、一番反省することは私自身がきこえる人間ですか

ら、聴こえない・聴こえにくいということについて本当に知らなかったのです。

ほとんど理解していなかったと言っても過言ではありません。その頃の「時代」ということもあります。いわゆる障害は治すもの。もう一つは、聴こえないよりきこえる方がいいという、便利さはもちろんありますが、そのような価値観がありました。20世紀でしたからいわゆる科学の時代で、なんとかして治すという考え方が非常に強かった時代でした。本当に聴こえない・聴こえにくいことを私が理解するより以前に、なんとかして娘をきこえるように、あるいは話せるようにしたいと思う親でした。そのような親だったことが娘に対して本当に申し訳なかったなあと思います。

○私と娘との葛藤

私と娘との葛藤はいろいろありまして、当然ですが、きこえる私と聴こえない娘との間には立場の相違というか、考え方の相違がたくさんありました。例えば「インテグレーション」いわゆるきこえる子どもと一緒に勉強する、地域の幼稚園や学校に入ることについて私はなんの疑問もなくその方向に娘を導いていきましたが、今考えると聴こえない娘の立場をほとんど理解していなかった、と思います。たぶん娘にとってインテグレーションということは、きこえる子どもたちの中にたった一人入れられるということで、そこから地獄が始まっていたのだという風に思います。そんなことが私は本当にわからなかった、理解していませんでした。それから家庭内でのコミュニケーションの齟齬(そご)ですね。今日は「こめっこ」のとても良い活動を見せていただきました。親御さん達も一生懸命手話を学ぼうとしていらっしやっただので、ああいいなあと思って拝見させていただきました。私の娘は聴こえないわけです。4人家族で、あとの3人は全員きこえるわけです。家庭内ではみんな音声言語でコミュニケーションしていました。そんな中で娘も否応なく音声言語を話さなくてはいけない状況でした。娘は何もわからないままに毎日の生活が流れていったのではないかと思います。わからないままにと申しましたが、目は見えますので目で見て何となく毎日の1日の流れとか、あるいは毎日やることルーティンはわかったと思います。私はそれで十分娘がわかっていたと理解していたのですが、娘は手探り状態で毎日を送っていたのではないかなと思います。ですから立ち位置の齟齬があり、コミュニケーションの齟齬がありますので、大喧嘩をしました。20歳の娘が大学に入ってすぐの頃です。なぜかというとな娘は大学に入って初めて手話に出会ったのです。世の中にこんなに通じ合うコミュニケーション手段があるのかと、本人は気づいたらしいです。それで私たち家庭の中の3人のきこえる人間に対して、たった1人で立ち向かってきました。3対1。その時の様子をお話しすると時間が長くなりますので、はぶきます。とにかく今はその嵐を起こしてくれたことを娘に感謝しています。ほとんどの聴こえない・聴こえにくい人はそこで大喧嘩なんか起こさず、「はい、さようなら」と言って自分だけ下宿生活を始めます。きこえる親や兄弟というより1人で下宿生活をした方が「いろんな辛い・さびしい思いを味わわなくて

いい」となってしまう。こうした話はのちには娘から聞いた話です。友達がそのように言っていたよと。このように娘との葛藤はいろいろありました。

○「ヘレンケラーのことば」

ヘレンケラー、みなさんご存知ですよ。三重苦のずいぶん前に亡くなりましたが。彼女が日本に何回かやってきました。その時に記者からインタビューを受けました。「あなたは聴こえない、見えない、話せないという3つの障害を持っていますが、この中のどれかを神様が元に戻すと云ったらどれがいいですか？」と。どれだと思えますか？ほとんどの親御さんは「見える」と答えられるのですが、彼女は「きこえる」を求めました。それはいかに情報が入らないかということですね。きちんとした情報が十分に本人に入っていない。それは目が見えるので、聴こえない人達はみんなと一緒に行動したり、わかっているように行動したりしますよね。それで他の人には障害が理解しづらいわけです。いわゆる見えない障害ともよく言われます。相手の頭の中をのぞくことはできないですね。よく子供たちに「リンゴはどれか、わかった？」と聞きますと、「うん」と頷きます。「リンゴってどんなものかわかった？」と聞くと、「うん」と頷きます。でも、頷いた頭の中にはどういうリンゴがあるのか見えないですよ。その子の頭の中に赤いリンゴがあるのか、青いリンゴがあるのか、パーンと割ったリンゴの形があるのか。あるいはリンゴを食べた時の味とか、サクツとした噛みごたえの印象とか、どれかわからないですよ。それを私たちがわかる言葉、音声言語では私たちには伝わってこない。頭の中で何を思っているのかわかりづらいです。いわゆるコミュニケーション手段が違うというのはそういうことになります。したがってきこえる人間には想像しにくい障害でもあります。

今、私は都立大塚ろう学校で0歳の赤ちゃん15人くらいを担当しています。初めて来るお母さん方ばかりです。そのお母さんにどういう風に、この「聴こえない・聴こえない」ということをわかっていただくかといろいろ工夫しています。一つはここでもされるかも知れませんが、難聴疑似体験です。印象材、耳型を取る時に注射器で入れますよね。それをお母さんの耳に入れてもらいます。するときこえが40～45dBくらいになります。その状態でお店に買い物に行っていたいたり、学校形式の授業を受けてもらったり、お母さん同士でおしゃべりをしてもらいます。そうすると45dBくらいの聴力の人にはこんな感じで「きこえる、いや聴こえない、えー」ということで保護者の方はすごくびっくりされます。後はマイノリティ体験といって、ろうの方、5、6人集まっただき、そこで手話で井戸端会議をしてもらいます。そこにきこえるお母さんに1人だけ10分間くらい入ってもらう。親御さんはわが子が聴こえないとわかってすぐの方です。ほとんどの親御さんは手話を知らない、入ると「？」という感じですよ。聴こえない人たちがおしゃべりをして笑うと、どうして笑っているかわからないので、1歩か2歩遅れてにやっと笑うしかない。その他にも「聴こえない・聴こ

えにくい世界」を知るためにいろんなことを企画してやっています。そうやって親御さん達に聴こえない子供って家庭でどうなっているのだろうと経験してもらいます。さっきのマイノリティ体験の立場を逆にした形ですよ。みんな音声言語で話している中で、お子さんだけがわからないでいるというものの逆バージョンを経験してもらうわけです。そういったことで親御さんに、少しずつ聴こえない・聴こえにくいということはどんなことかを理解していただく。

この聴こえない・聴こえにくいということは、二次障害としてコミュニケーションの障害を引き起こします。ここにいらっしゃる方はみなさんおわかりですね。きっと何とかしてコミュニケーションを子どもと取りたいということで、手話を学ぼうとされていると思います。

○「8人の仲間」

私は子どもを育てた時、8人のグループ指導の中で育てました。その子どもたちには聴力の差がいろいろありました。

うちの子は100dB以上ですが、60dBくらいの軽いお子さんもいました。その親御さんたちとはずっと交流しています。今でも集まって話したり、もっと若いころには旅行に行ったりしております。中には80歳を過ぎたお母さんもいらっしゃいます。みんなが集まると、毎回最後にみんな泣きながら話すことになるんです。「どうしてあの若い時に子どもの聞こえについて私たちはわからなかったのだろう。本当にかわいそうなおことをした。一生懸命朝から晩まで子どもに話しかけたのですよ。スカートのすそが擦り切れたり、ジーンズの膝に穴があいたりするくらい子どもと向き合って話したけど、あの話した内容のどれくらいが子どもの中に入ったんだろうね。」と嘆いています。子どもがわからなければ、こちらの顔がどんどん鬼みたいになっていきます。今でも娘たちに、あの頃のお母さん、鬼婆みたいだったって言います。

8人のグループの中には、家庭における葛藤や結婚後のことや、登校拒否をしたお子さん、あるいは登社拒否、今も引きこもりのお子さんもおられます。それらの子どもたちは全員、聴力が60～70dBくらいの軽いお子さんです。ほかの重いお子さんは結婚して幸せに暮らしています。この違いは何？という感じですよ。多分、聴力の重いお子さんは自分だろうと開き直りが早かったと思います。したがっていつでもどこでも「自分は聴こえません」と開き直って社会に出ていきました。軽いお子さんは、なまじしゃべれます。しゃべれるというのは子どもにとっては良し悪しなのです。なぜなら、なかなか社会に理解してもらえない。登社拒否をしたお子さんはきれいにしゃべれました。いくら会議の内容がわからないと訴えても、上司は「お前、眠っていたのではないか？ちゃんと聞いていないからだろう」という風にしか受けとってもらえない。彼がきこえる音はわずかです。65dBくらいだったと思いますが、いくら一部分きこえると言っても会議の内容が全部わかるわけではないじゃないですか。やはり話というのは1

00%情報として入ってきて、初めて理解できるものです。60dBや65dBだと、ところどころしか聴こえないし、ところどころしか理解できない。それで全部を理解するのは難しいです。でも、それがなかなかきこえる人にはわからない。周りの人はもちろんだが、親御さんも理解できない。「あなたはそんなにきれいに話せるのだから、会社でも十分やっていけるでしょう」と両親に言われる。その話を親御さんから聞いた時、これは教育が悪かったなあと思いました。最終的には教育の責任です。そういう風にか子どもに言えない親御さんを作ってしまった。乳幼児相談の時に親御さんに対して、聴こえない・聴こえにくいってこういうことだよ、軽・中等度難聴だからって安心してはダメよ。軽・中等度だからこそ難しいことがたくさんあると理解してもらうことだと思いました。親同士で集まった時には、そういうことをみんなで言い合って、最後は泣きながら反省ばかりです。

○親の思い

きこえる親の思いはいろいろあります。しかし、子どもの世界を知る努力を最初に行ななければならない。今、乳幼児相談を行っていますが、先日、0歳児さんの親御さん達が指導の後、お弁当を食べていました。隣の部屋で耳を澄ましてきいていたら、「ねえ、私はこの子をフランス人だと思って育てている」「あなた、フランス人？うちはイタリア人よ」と話されていたのです。親御さん達ここまできたのかと、私はすごく嬉しかった。いわゆるコミュニケーション手段が違うということです。この子たちは目の人たちです。目でわかるコミュニケーション手段を使ってしっかり人格形成をしていく、それが0歳の親御さんには染み透っているなど、嬉しく親御さんたちの会話をきいていました。聴こえない・聴こえにくいことの正しい理解を、早く親御さんにしていただくことが一番大事なことだと思います。

2. 指導者として

指導者として反省することが多々あります。私は乳幼児期から子どもたちを見ていて、今45、6歳になっているお子さんが一番上ですが、毎年お子さんや親御さんと会合をもって、といっても飲み会や合宿なのですが、そこでいろんな話を伺っています。子どもたちの成長の様子をじっくり見せていただいています。相談事もいろいろあります。相談に来るお子さんは、重いお子さんの相談はほとんどなく、軽・中等度難聴の方がほとんどです。小さい頃はペラペラしゃべって、みんながうらやんで「いいわね」と言われたお子さんの相談が多いです。登社拒否になって、「先生どうしたらいいだろう」「あなたはどう思うの」と何時間も話して、結論を私は出しませんが、こんな手があるよと話します。「お友達には相談した？」聞くと、ろうの友だちに相談したと。軽・中等度の彼女にろうの友達は「声を切れと言った」と。先生はどう思うかと聞かれたので、私もその方がいいと思うよと言いました。そして彼女は帰りました。どうするかは自分で

決めなさいと言いました。1ヶ月くらいして手紙がきました。「先生、また会社に楽しく通っています。声を切りました。かわりにパソコンで自分のトリセツ（取扱説明書）を作って、会社の人全員に配りました」って書いてありました。良かったなと思いました。ただ最後に“追”と書いてあって、「先日、実家に帰って母に声を切って会社で仕事をしていると話すと、母がすごく悲しい顔をしました」と。彼女がなかなか声を切れなかった理由は、お母さんとの思い出です。厳しい発音指導にお母さんと普通った、それを捨てるのは自分のプライドを捨てるみたいな気持ちがあったのでしょうか。子どもって優しいです。お母さんのことを思うと、声を捨てられないとずっと思っていたのだと思います。このように相談者の実態は軽・中等度の方が多いです。自分はろう者、聴こえない人だとみんなに明らかにしたお子さんは何の屈託もなく毎日楽しくやっている方が多いです。

○登校拒否

登校拒否を起こしたお子さんや親御さんからの相談もあります。登校拒否をしていた中学生のお子さんが「先生にはわからないだろうけれど、私は毎日曇りガラスの中での生活を強いられている」と言いました。そうですよね、はっきりわからないのですから。それから軽・中等度のきれいに話す中学生。ある時、親御さんの胸ぐらをつかんで「何をペラペラしゃべりやがる。俺には全然わかんねえ」と言った。お父さんもお母さんも彼はきれいにしゃべるので、聴こえづらいこと、聴こえないということをつい忘れてしまいペラペラしゃべってしまいます。私たちきこえる人間は、わが子が聴こえないことを忘れず。インテグレーションしたお子さんの学校に行き、担任の先生に話を聞いてもそうです。「あ、30人の中の1人だった、その子が聴こえない子だったということを忘れちゃいます」と正直な担任の先生はおっしゃいます。聴こえない・聴こえにくいとはそういうものです。きこえる人間はいつもわが子は聴こえない・聴こえにくいのだということを頭の片隅において生活していただきたい。これは親としての責任だと思います。私はいつも、もし娘がここにいたらどうして欲しいかと考えます。あるいは電車の中でアナウンスがあるとこれはうちの娘にはわからないな、娘としてはどうして欲しいかなって。そのような視点を持って生活する必要があると思います。

「俺の発音がなぜわからないのか」と、これは大学生が教授に言った言葉です。この言葉の裏には、厳しい発音指導を経て自分ではきれいに話せると思っている彼のプライドがあります。しかし他人さまが聞くと「中国の人？」と言われる。うちの娘もそういう風に言われます。そういうものなのです。

聴こえない・聴こえにくい人たちは転職が多いという話をきくと思いますが、まず、お母さんがわが子は大丈夫と思いきっている。わが子はきれいに話せるので職場でもうまくやっていけると思っているのです。本当の意味で聴こえない・聴こえにくいということを親御さんが理解していない。

3. 私が考えたこと

私が話した中で考えたことですが、少しでもきこえるようになること、少しでもきれいに話せるようになること、その意味は何？誰のためですか？もちろん「きこえる」ことは便利です。例えば両耳の人工内耳、とても今流行っています。あるお母さんと一緒にいた時、知らない人でしたが私に話しかけてきて「先生、うちの子、今右耳に人工内耳をしています、1週間後に左耳に人工内耳をしようと思います」と言われました。「両耳に人工内耳をされるのですか？」と言うと「はい」と。「どうして両耳にしたいと思われたのですか？」ときくと「今、右に人工内耳をつけているので、右から名前を呼ぶとすぐ返事をしてくれますが、左から呼ぶと振り向かないのです」と言われた。「えっ？」と思いました。誰のために人工内耳をするの？お母さんが子どもの前に行って話しかければいいのではないかなと私は思います。そのあたり、やはり難しいです。

○聴覚活用の限界

聴覚活用の限界というものがあります。都立大塚ろう学校でも補聴器をして、聴覚を活用することは、親御さんにも実際にやってもらっています。先ほどお話したように、大きくなった人たちの実態を考えると、人工内耳をしたから、あるいは軽・中等度難聴だからすべてのコミュニケーションがうまくいくとは限らないということです。聴覚活用が100%できる保証はありません。普通の生活の中ではほとんどわからない。防音室ならよく聞こえるが、実際の生活場面ではあらゆる騒音があります。その中で聞きとるのは難しい。単語くらいならわかるかもしれないが、お話は難しい。だからみなさん飲み会に行くのを嫌がりますよね。手話通訳がついてればいいのですが、飲み会での騒音の中ではさっぱりわからない。結局、話が分からないのでひとりで水割りか、ビール飲んでいとおっしゃいます。アイデンティティの確立ですね。周りがあなたはきれいに話せるから、あなたはきこえているからと言われると、きこえる人間なのか、聴こえない人間なのか、自分は何もの？とはっきりしない。そうすると就職するとき、つい「電話ができます」と言ってしまう。私は、発声・発語というのは、きこえる人に対するサービスだと思います。きれいに話してくれるとこちらはわかりますが、こちらの話すことは相手には100%届かない。えっ？ときき返されると、きこえる人間はなんでそんなにきれいに話せるのにきき取れないのだというような表情を作ってしまう。嫌な表情を相手はすぐ気づいてしまう。会社ではとてもきき返すことはできませんと、みなさん言われます。聴覚障害者同士のコミュニケーションは、両方とも聴こえづらいわけですからさらに難しいです。社会におけるコミュニケーションも同じです。きれいに話すと、相手は話せるのだからきれいにきこえると勘違いします。このように聴覚の活用はきこえる人間のようにはいかない。

4. 保護者支援の重要性

こうした私の反省の中から早くからの保護者支援が重要だと思い至りました。

(1) 「聴こえない・聴こえにくい」ってどんなこと？

親御さんに子どものきこえ、聴こえにくさ、聴こえないことを理解してもらう。人工内耳、軽・中等度難聴、高度難聴も全く聴こえないことがあります。人工内耳をはずしたら全く聴こえない。軽・中等度難聴の人も騒音の中では全く聴こえないのと同じです。少しきこえても全体を理解することはできない。時と場所によってはきこえが違う。静かな防音室ではきこえても、騒音の中では聴こえない。私はいつも冗談めかして言うのですが、聴こえない・聴こえにくい子どもにランプのついたベルトをつけて、ランプの青がついたらきいたことがよく理解できる、黄色は半分、赤なら全くわからないとランプの色で分かるといいのと思っています。だって子どもは言えません。軽・中等度難聴の一番大変なのは、自分がどれだけ理解して、どれだけ情報を得たのかがわからないということ。少ししか情報が入っていないのに、それが全部だと思ってしまう。そこが難しいところです。

やはり聴こえない・聴こえにくい子どもが生活するのに一番適した場所は、ろう学校だと思います。紹介文にもありましたが、私は最初、私的な機関で仕事をしていました。でも子どもたちを教育する中で、この子どもたちが特に小さい時に育つ場所、乳幼児相談・幼稚部・小学部・中学部くらいまではろう学校というコミュニティの中で、わかる手段を使って人格を形成して、自分に自信を持って育っていくことが一番大事だと思いました。したがって子どもたちのいるべき場所はろう学校だと思い、ろう学校に変わり、今も仕事をしています。

(2) わが子は“目の人”であるという意識を

親御さん達には、わが子は“目の人”である意識を持っていただきたい。手話はわが子の言語であるということです。先ほどフランス人、イタリア人と言う話をしましたが、子どもは「手話人」です。また視覚的手段を多用していただきたい。手話を用いてのコミュニケーションは、乳幼児相談の親御さんにはまだまだですよ。だから視覚的手段、写真カード、実物など子どもがわかるものを、必ずこれだよと見せます。パパが帰ってきたよと、パパの写真を見せれば子どもはわかります。ぜひ実行していただきたいです。

(3) 常にわが子が分かる手段を考え、工夫する親に

どうすればわが子がわかるかなと、手段を工夫する親御さんになっていただきたい。そのためには、聴こえないということを常に頭においてないと工夫や考えは浮かばないです。

(4) 価値観の見直し

みんな違って、みんないいという考えです。

今、15人ほどの0歳児が相談に来ていますが、半分は重複障害のお子さんです。ダウン症、知的、肢体不自由のお子さんなどです。でもそれぞれ違い、それぞれの子どもの成長があります。その子なりの成長を認めて、親御さんにはぜひ価値観を変えて、みんな違ってみんないいという価値観で育ててほしい。

(5) 乳幼児相談で親子関係が決まる

私は結構恐ろしい事を言う、とみんなから言われますが、「乳幼児相談で親子関係が決まる」と思います。乳幼児期に親子でコミュニケーションがとれないと親子関係はうまくいきません。わが子はどんな子どもかをしっかりつかみ、聴こえない・聴こえにくい世界はどんな世界かをできる限り学んで知ってほしいです。きこえる親御さんには未知の世界だと思えます。でもこの子が生まれたおかげで、知らない世界を知ることができる。手話なんてこの子が生まれなかったら覚えられなかったでしょ。日本語だけでなく手話言語と二言語も覚えられるなんて幸せだと、ぜひ思っていたきたい。大変だなと思わないでください。わが子のためですから。

そして私は親御さんに「きこえにしがみつかないでください」と言います。

Ⅱ. これからの聴こえない・聴こえにくい子どもの子育て

世の中も変わり、手話言語条例もできて、手話も市民権を得るようになりました。これからの聴こえない・聴こえにくい子どもの子育ては、子どもがまずわかることを考えていただきたい。自分がわからないことがわかる。このところ都立大塚ろう学校の子どもたちは手話で育ってきました。幼稚部さんで「自分は聴こえない人間だ」と自己認識ができています。例えばコンビニに買い物に行く時、メモ帳と鉛筆を持って行きます。自分が買いたいものを書いて、コンビニのお兄さんに渡します。そうするとお兄さんも覚えてくれて、その子が来るとお兄さんが自分からメモ帳を持ってくるようになったそうです。

まったく聴こえない子が、夏に区民プールに行った時、監視員のお兄さんに、「僕は聴こえないから大きな滑り台をすべる時、いいよという声ではなく、両手で大きい丸を作って合図をしてください」と身振り手振りで伝えたそうです。ちゃんと通じたということです。その子は小学部1年生でした。

家族中が手話での会話をしている家庭の話です。これは昔のことを思い出すと夢みたいな話です。1歳3ヶ月のきこえないお子さんです。4人家族で、お兄ちゃんは4歳です。3人はきこえますが、家族全員が手話で話をします。ある時、「みんな何のテレビ

が好き？」という話になりました。お父さんはニュース、お母さんはドラマ、お兄ちゃんにはレンジャーものとか言っていた時、1歳3ヶ月の子が出てきて、(身振りで)「僕はいない・いないばあーが好き」と。1歳3ヶ月で家族のだんらんの中で会話ができるのです。うちの娘は2歳になってもポカーンとしていました。ああいい世の中になったな、とその話をきいて思いました。

1. 子育ての目標

子育ての目標ですが、みなさんは子どもが将来自立できることを一番に考えておられると思います。親が死んでも1人で生きていけるようにと。そのために必要なのは、子どもが自分で考えて、自分の人生を自分で決定できる人間に育てることだと思います。

2. 子育ての基本

常に子どもの考えを尊重してください。あなたは何がしたいか、どうしたいかを子どもに考えさせて、子どもが動く。小さいから失敗もあります。それでいいです。あせらず個々の育ちを大切に、そして比べない。比べる時はわが子の1ヶ月前や1年前と比べてください。必ず成長があるはずですよ。そしてあきらめない。今はいろんなことが聴こえなくてもOKになっています。医師や薬剤師になっている人もいます。いろんなことが可能です。

ただひとつあきらめることがあります。何でしょう？そうです。「きこえるようになること」です。これはあきらめてください。0歳の親御さんには0歳の時点であきらめてほしいのです。そうすれば子どもは幸せです。子育ては最大の贅沢です。無駄の積み重ねみたいなものです。しかし本当は無駄ではない。子どもにとっては大事な積み重ねですが、つい親は合理的で時間のかからない方法を選びたがります。それは子どものためにはなりません。子どもとの共感体験をたくさん作ることが大事になります。

Ⅲ. 聴こえない子どもを育てること

1. わが子は聴こえない子だと認識する

聴こえない子どもを育てる時に大事なことは、「聴こえないわが子が大好き」になっていただきたい。これはきこえる親にとっては一生の課題だと思います。つついこの子がきこえていたら、と思いますよね。うちの主人も今でも「千里がきこえていたらな」と言います。でも「千里は今不幸せ？」と聞くと「いや、幸せそうだ。いつもニコニコ笑っている」と。子どもが幸せなら、きこえても聴こえなくてもいいのではないかと。きこえても不幸せなお子さんはいますから。そうやって自分を納得させています。時折、私たちにそのような思いがわいてくるのは、きこえる便利さを知っているからです。そ

の便利さを子どもにも与えたいと思うのは親心です。それはよくわかります。

2. 聴こえない・聴こえにくいことの理解のために

①ワークショップなど

聴こえない・聴こえにくいことの理解のために、ワークショップ、難聴疑似体験、マイノリティ体験、ロールプレイをします。耳を塞いで子ども役になったりして心理劇等をします。耳栓を1日使用して生活するとか、テレビのボリュームを切って1日過ごす等、なんとか聴こえない・聴こえにくいとはどんなことかを分かる努力をしていただくことは大事なことです。

②多くの成人ろう者・難聴者に出会う

たくさんの方と会うこと。こめっこはろうの人が多いため、みなさん幸せだと思います。積極的にろうの方と話をしてください。

③手話で話そう

手話を早く覚えるにはろうの方と話すのが一番です。ろうママや成人ろう者、ろうの教員と手話で話すことを心がけてください。

IV. 将来、豊かに社会生活を営むために

将来豊かな社会生活を営むために、大切な4つのことがあります。「コミュニケーション能力」「情報収集力」「想像力・創造力」「知識」。知識は最後です。前の3つが揃っていれば知識は自然と身につきます。4つ全部お話しするのは時間がないので、コミュニケーションについてだけお話しします。

1. 最大の武器はコミュニケーション力

最大の武器はコミュニケーション力です。社会の中でうまくいっているお子さんは、コミュニケーション力がある人が多いです。「笑顔、人柄」、そして「人間大好き」、「多くのコミュニケーション手段」を持っている。「自分が何者であるかが語れる」。自分は聴こえない人間です。だからパソコンで話しましょう、スマホで話しましょうと自分から積極的に言える人。

○事例・M君の場合

M君の事例を話します。コミュニケーション手段は手話、指文字、文字言語、サイン。音声は不明瞭。115dB。自分はどんな人間かを正しく宣言できるアイデンティティを

持ったお子さんで、今33歳になります。彼が結婚した時、結婚式に参加しました。その時に上司の人が祝辞を述べました。「彼は会社の中では、とても信頼が厚い人です。あだ名は“神の目を持つ男”です」と言われました。彼は自動車工場で最終的な検査をする部門にいます。そこで彼が検査したものは絶対間違いがない。会社中がそれを知っていて、“神の目を持つ男”と言われているわけです。彼は手話しかコミュニケーション方法がないので、その部署では彼とコミュニケーションをしたいと手話を全員が覚え、部署の中で手話通訳士を取った人がいるくらいです。

ろう成人は、仕事は文字言語で友人との語らいは手話言語とメール。十分、幸せです。

2. コミュニケーションとは

コミュニケーションというのは「互いにわかり合うこと」です。私が娘に期待したのは、わかり合いたいという気持ちもありましたが、バカな親で私と同じ音声言語を話させようと試みましたが、残念ながらみなさんに通じるような音声言語は話せない子どもです。ただ、私とコミュニケーションする時は、ちょうど今イギリスから帰ってきていますが、私に対しては音声言語を使ってくれます。私に対するサービスです。私は手話で話します。

今、彼女はイギリスのロンドンで生活をしています。仕事はダンスをやったり、ダンスの作品を作ってコンペに出したりしています。大学時代は美術を専攻していたので、イギリスの博物館や美術館で、英国手話で芸術解説もしています。イギリスでは娘が手話で芸術解説をすると横に音声通訳がつきます。だから10~15人くらいの集団で、きこえる人も聴こえない人も一緒に娘の芸術解説を見たりきいたりします。日本でもやりたいということで、この前娘も呼ばれて説明をしたらしいです。

○英国でのコミュニケーション

娘のイギリスでのコミュニケーション手段は英国手話、英語の読み書き、身振り、表情、日本手話、日本語の読み書き、音声は不明瞭です。

娘が初めて英国留学した時の英国手話の習得方法ですが、娘はお酒が好きで、イギリスにはろうの人が集まるパブがあり、そこに毎晩通って手話を覚えたと言っていました。「初めて英国留学した私(娘)は、英国手話を習得し、英国手話と筆談をコミュニケーション手段とした。私(娘)が通っていた学校は、様々な国籍の人の集まりでした。彼らは私(娘)とコミュニケーションしたいと自発的に手話を習得し、2学期末にはクラスの60%が手話をマスターしていました。この学校はダンスの学校です。下宿先の60歳のおばあさんも、聴こえない私(娘)とのコミュニケーションに必要だということで、当たり前のように手話をマスターしてくれました。従って私(娘)は英国でのコミュニケーションには困りませんでした」

では、DVDを流していただけですか？これは御覧になった方もおられるかも知れませ

んが、NHKの「こども手話ニュース」で娘の活動を紹介したものです。

(DVD)

セッション／

ロンドンで開かれたパラリンピック。開会式では多くの方がパフォーマンスをしました。

この開会式に日本人の女性が出演していました。

こんばんは。こども手話ウイークリーです。今日紹介するのは、ろう者の南村千里さんです。徳島県生まれの東京育ち、今はイギリスに住んでいます。

南村さんの仕事は、ダンスの振り付けをしたり、自分で踊ったりすることです。イギリスのロンドンで開かれたパラリンピックでは開会式に出演しました。性別や年齢、障害のあるなしに関係なく、いろいろな国の人と一緒に仕事をしています。

音楽を見てわかるように表現することに取り組んでいます。

風をイメージして踊る南村千里さん。デジタルの技術を利用して作品を作りました。踊る姿を撮影し、漢字と合成します。また床を叩いて音が出ると、強く光ります。

ダンサーの自由な動きが作品になります。

南村さんの仕事の中心は振り付けです。きこえるダンサーにイメージを伝えます。この時、音楽は流しません。ダンサーは踊りで音楽を表現します。

今月3日、東京で行われたパフォーマンスを見に行きました。音が出る車いすを中心にダンサーが踊ります。来年も行われる予定で、その時は南村さんが振り付けを担当します。

南村さんは自分の意思をしっかり伝え、イギリスの人達も楽しそうに取り組んでいましたね。次回のパフォーマンスが今から楽しみです。

南村さんの活動は、ヨーロッパやアジアなどに広がっています。今はイギリス、日本、カナダを中心に活動しているそうです。世界各国で仕事をするとその国の文化を知ることができて面白いと話していました。南村さん、ありがとうございました。これからもがんばってくださいね。応援しています。(DVD終了)

今見ていただいたのが娘の活動の様子です。イギリスは彼女に合っているようです。1年に何回かは日本に帰ってきますが、イギリスを拠点に活動をしています。11月5日の日曜に奈良県の大芸術祭で、パフォーマンスと講演をする予定になっていますので、お時間があれば参加していただければと思います。南村千里とネットで調べていただくとわかると思います。

3. 「聴こえない・聴こえにくい」子どもとのコミュニケーション

○事例：2歳7ヶ月

これは都立大塚ろう学校で2歳7ヶ月のお子さんが手話で話している様子です。

* 動物園に行った

動物園に行き、その時の様子を話してくれました。先日パンダの赤ちゃんが生まれましたが、まだいなかったと。まだ外に出てないですからね。赤ちゃんとお母さんはあっちの部屋にいた。お父さんは1人で歩いていた、僕は見たんだと自慢げに話していました。

* もも太郎の話

そしてもも太郎の話をした時に自分でも話すと言い、その時驚いたのは、おばあさんが桃を持って帰る時、「そうだ、おじいさんは桃が好きだから持って帰ろう」と気持ちを表現している。そんなセリフはないです。本人が自分で考えて入れたのです。

○家庭の中で

家庭の中で小さいお子さんと過ごす時、親子、兄弟で楽しい遊びをたくさんしていただきたい。たとえば卵のパックに泥をいれてタイ焼き屋さんごっことか、ダンボールの木を部屋の中に作って春夏秋冬と季節に合わせて子どもと葉っぱなどを付け替える。6月の雨の時は傘や雨粒を子どもと一緒に切って貼る、夏は緑の葉を作って貼る。それをお部屋の中に作っています。ただ作るだけではなく、必ず外に出て木の様子や外を見て、お家の中で再現して親子で遊んでいる。

あるいはシャケごっこ。シャケは川を遡上して卵を産むとお兄ちゃんが話をしていたら、それをお母さんが聴こえない子に手話で一生懸命説明したのですが、子どもはポカーンとしていた。さすが子どもは子ども同士。お兄ちゃんが水色の布を持ってきて川にした。シャケを自分で魚の形に切って、布の川に泳がせた。お兄ちゃんは熊になって、シャケを捕まえて食べる真似をした。その様子を聴こえない弟は食い入るように見ていた。お母さんは、お兄ちゃんに負けたと言っていました。その後がまたよかった。その聴こえないお子さんは家で何度も楽しくお兄ちゃんとシャケごっこをして遊んだ。ある時、ろう学校で遊んでいる時、ライオンを押すと肉が出たり、鶏を押すと卵が出てきたり、その動物と関連性のあるものが出てくるおもちゃがあった。そこに熊がありました。押す前に先生が「熊さんの好きなものは何かな？」と聞いた。先生の頭の中ではくまのプーさんで、はちみつと考えていたら、子どもが「シャケ」と指文字をした。先生は「えっ!」とお兄ちゃんと遊んだことが生きています。ぜひ家庭の中でいろいろ工夫して、子どもと一緒に遊んでいただきたい。1回だけでなく、子どもが興味を示したら何度でもあきるまで同じ遊びでいいです。ただ同じ遊びでも遊ぶ相手は、お母さんやお父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと、幼い子どもより多くの経験をしているからプラス α なことができます。子どもが喜びそうな味付けをしながら、毎日楽しく遊んでいただきたい。

○日常生活を丁寧に

日常生活を丁寧にしていただきたい。

たとえば、サルスベリの木はすべすべしていますね。子どもと一緒に触ってほしい。ただサルスベリの木と名前を教えるだけでなく、どういう木かということと一緒に感じる。何気なく鍵を閉めて家を出ます。子どもは毎日それを見ているですが、なぜ鍵を閉めるかを説明しているかどうか。オクラも毛がいっぱい生えていますね。他には毛が生えているものはないかな、そうだと朝顔の葉っぱにも毛が生えてたね、一緒に外に見に行こうと。ちょっとした手間をかけて、子どもと一緒に目を使って、触覚を使って手話でお話をしていただきたい。掃除機も子どもは見ているだけです。埃が掃除機に吸いこまれているが、それはどうなるのか。たまった埃はどうするのか。そのように丁寧に子どもに接することが必要だと思います。

ろうママから教えられました。ろうの方は手話が使えますから、手話を導入した当初、私はこちらから何も助言、アドバイスすることはないのかなと思っていましたが違います。ろうママは手話ができるから子どもとのコミュニケーションは十分と思いがちですが、全然違います。丁寧に常に子どもに情報をいかにして入れるか、心がけていただきたい。きこえる親御さんは手話を使って子どもと話そうと努力しますが、ろうのお父さん、お母さんは自分たちは手話を使っているからいいわ、と考えるかもしれません。しかし、聴こえない子どもはきこえる子どもより情報量がすごく少ない。あるろうママが「私たち怠けてはいけませんよね。丁寧に日常生活の中で、せっかく手話を使えるのだから子どもに情報を与えないといけませんよね」と言ってくれた。きこえる子どもに比べて耳学問ができないので、その分しっかり手話でいろんなことを伝える必要がある。昔、私は朝から晩まで聴覚口話で話をしていましたが、それと同じことを手話でする必要がある。それをしていれば、子どもは世の中にはいっぱい情報があるということを知る。知っていれば少し大きくなれば、自分から情報を取ろうとする。さっきの社会の中で大事なことの4つのうちの情報収集力。それが少ないと社会の中でうまくやれない。読んだり、見たり、ネットで調べたり、何でも知りたいという気持ちになる子どもを育てていただきたい。そのためには小さい時に手話で子どもにたくさん情報を入れることが大事です。子どもは入れられた情報しか世の中には情報はないと思ってしまう。きこえる子どもはテレビからも情報は入るし、お父さんとお母さんが喧嘩していてもそこから情報は入るわけです。その情報量は、きこえる子どもと聴こえない・聴こえにくい子どもとでは格段の差があります。そこを心して子どもと付き合っていたきたい。

4. コミュニケーションのとり方

コミュニケーションの取り方は、『子ども“に”話す』のではない。子どもに話すは上から目線。『子ども“と”話す』。「あなたは思うの?」「あなたが決めてね」と、この姿勢を崩さないようにしていただきたい。「子どもの知りたいことを話す」。また、

「子どもが話したいことを話させる」。「ちょっと待って」「あとで」はない。子どもが話したい時には、料理していても手をとめて聞いてあげる。何かしていてもそれを置いて、きいてあげる。子どもに「待って」は言わないようにする。

V. 保護者として大切なこと

○事例→自分は何者か？

小さい時から自分は何者かがわかる子に育ててほしいのです。1歳3ヶ月のお子さんが夏休みが終わって9月に久しぶりにろう学校に来ました。私は1ヶ月に一度しか行かないのでなかなか顔を覚えてもらえないのですが、玄関でばったり会った。私の顔をじっと見て、(手話で)「あんた南村?」「そうそう、よく覚えていたね」と。すごいと思いました。

聴力40dBのよくしゃべるお子さんがいて、そのお母さんは熱心な方で、将来は地域の学校に行くことを決めていました。6年間、月1回お会いしていたのですが、会うたびにそのお母さんを私は泣かせていました。なぜかというと40dBでも情報が入らないことが多いですと。やっぱり小さいうちはろう学校が一番ですよ、と話をしていた。お母さんは、せっかくインテグレーションさせようと思って頑張っているのに、この先生はなんてことを言うんだと悔し涙を流していました。お母さんはいよいよ就学が迫って、地域の幼稚園に子どもの様子を見に行きました。その子は鉄棒に乗って園庭で遊んでいる友達を見ている。自分と同じ5歳児の女の子グループを見つけて、仲間のところに行った。彼女はきれいな声で何か言って友だちから何か返事が来たけど、園庭で皆がわあわあうるさくてわからなかった。ポカンとしている様子だった。そのグループは園庭に散ってしまった。しょうがなくその子はまた鉄棒に戻っていった。園庭ですーっとそれを繰り返していた。それをお母さんはずっと見ていた。その後、園舎に入って先生がお話をされた。「〇〇をしましょう」と言われて、みんなは「はい」と手を挙げた。その子も手を挙げた。お母さんはわが子がわかっているか、わからないか表情を見たらわかります。「うちの子、わからないままに手を挙げている」と思ったそうです。その後、保育士の先生と話した時、「うちの子どうでしょう?」と聞くと先生は「大丈夫ですよ。地域の小学校で十分やっていけます。今は鉄棒に夢中みたいですけど」という答え。その時、お母さんは「あ、ダメだ」と思われたそうです。次に会った時、そのお母さんはろう学校に行きますと言われました。ろう学校に入学してしばらくして「この4月からろう学校に行っています。すごく楽しそうにしています」とお手紙がきました。そのお子さんは頭がよく、いろんなことがわかるのでいつ会っても厳しい顔をしていました。あまり笑顔もありませんでした。ところがこの4月にろう学校に変わってからは全然違って、表情が豊かになっていつもニコニコしています。吹っ切れたのです。

○「私が受けた教育」

いろいろお話をしたいのですが、最後に娘の文章をひとつ。

「私が受けた教育は聴者に合わせることでした。画一的で序列的な教育でした。私たちは「聴こえない」あるいは「きこえる」人である前に個人であり、各自の見方、考え、気持ち、感情があります。そして、様々な差異を持っています。その差異が刺激となって社会的意識、あるいは個人の相互関係を発達させます。つまり「聴こえないこと」に価値があるのです。」

IV おわりに

親が聴こえないわが子を認めることで「子どもは、生まれたままの自分を肯定し、好きになって何事にも挑戦できる」

時間が過ぎましたが、これで終わります。最後までありがとうございました。

(拍手)

～～質疑応答～～

河崎／

先生、ありがとうございました。

限られた時間ですので、質問のある方は遠慮なくご発言ください。

A／

実は、妹がろう者です。その妹の息子の子どもがこの7月に生まれ、まったく聴こえないと先生から言われ、夫婦でものすごく悩んでいます。息子は両親がろうなので理解があり、ろう学校でいいと言いますが、奥さんの方は地域の中で育ってきたのでろうに対して知識が少ないので、人工内耳の手術を受けて健聴者と同じ学校に入れたい、と夫婦でもめている。人工内耳の手術について教えていただきたい。効果があるのかどうか。

南村／

人工内耳を選ぶかどうかは親御さん次第です。効果については、お子さんによっていろいろ違います。また、その効果もなにを効果とみるかによって違います。きれいに話せるようになったから効果があったというか、蝉の声聞きこえるようになる人もいますので、いろんな音が聞きこえるようになったから効果と評価するか。ただし、人工内耳をしても40dBあるいは35dBです。私は老人性難聴で、夜になるとそのくらいの聴力になり非常に不便です。

A／

リスクは？

南村／

発音がきれいにならないとか、機器と合わない場合はきこえがよしとならない場合もある。私のところには何人も大学生になった人工内耳装用者が来て話をしてもらっています。人工内耳をつけてる方もいますが、5人来たら3人くらいは外しています。また全員手話を使っています。人工内耳をしたから魔法の杖のように手話を使わなくてもいいとか、誰とでも音声言語だけでコミュニケーションができるわけではありません。

河崎／

ありがとうございました。他に質問は？

B／

娘さんが聴こえないことに価値があると言われていますが、そう思えることはすごく素敵なことと思います。

南村先生が厳しく娘さんを育てたと後悔されていますが、娘さんがそういう考え方に至ったのはどういうご自身の育て方で効果があったと思われますか？

南村／

私が影響を及ぼしたことはほとんどないと思います。本人が自分で開拓していった。それは多くのろうの人にお会いできたこと、たくさんの軽・中等度難聴の方とお会いできたことだと思います。今でもイギリスにそのような友たちがたくさん来て泊って一晩中語り明かすそうです。

その中で自分自身で見つけた言葉だと思います。聴こえないことを何ら卑下することはないし、むしろ聴こえないことは価値があるものとわかったと思います。私は間違った育て方をしたなあと思います。あの時代だから仕方ないじゃないと娘は慰めてくれますが。

河崎／

ありがとうございました。他には？

C／

今、子どもは2歳でこれから幼稚園、小学校となりますが、今はろう学校かなと考えていますが、難聴学級もあると思います。高校を考える時に判断基準、この程度ならとか何か目安となるものがありますか？

南村／

目安は子どもが100%わかる環境を用意することです。

100のうち1つくらいしか分からないのでは、かわいそうです。曖昧な中に置かれることほど人間としてつらいことはない。わかる環境が一番です。人工内耳をしたお子さんできれいに話す子はけっこういます。でも大塚ろう学校では、みなさんろう学校に上がっています。幼稚部さんに全員上がっています。それは、きれいに話せてある程度きこえが取り戻せたけれども、何%かはわからない。そういう聴こえにくい子どももわか

る手段が手話です。聴こえない・聴こえにくい人は“目の人”ですから、“目の人”は視覚的言語が一番です。視覚的言語は手話しかありません。人格の基礎を築く大事な時期に、わかるという経験を子どもたち全員にしてほしい。

大塚の乳幼児相談を経た親御さんは全員、幼稚部及び小学部に進級しています。きこえる学校に行っても授業もわかりません。うちの娘も「何の授業をしているかさっぱりわからなかった。だから自分で勉強するしかなかった」と言っています。かわいそうなことをしたと思います。それは、私が聴こえない・聴こえにくいということがどういうことかをよく知らなかったのです。本当に反省です。だからこれからの人にはそのような思いはさせたくないし、親御さんにもしてほしくないし、子どもさんにもさせたくない。わかるという環境を用意してあげたい。何でもわかるよ、お友達とも手話ならわかり合える。コミュニケーションができるでしょう。1歳数カ月の子どもが手話でコミュニケーションしています。何して遊ぶ？おままごと？お馬さんに乗る？とコミュニケーションできている。昔のことを考えたらうそのようです。きこえる子どもたちと一緒にになったらそんなことはできないでしょ。

河崎／

ありがとうございました。他に質問ありますか？

D／

今、小学校で難聴の子と関わっていますが、勤のいい子で頭もよく、指導者から見て困り感がわからないお子さんなのですが、どのように関われば子どもにとって一番いいのかということをお教えいただきたいです。

南村／

難しいですね。わかっているように見せる、勤がよく頭がいいお子さんなのでそのようにしているが、実際にはわからないことがいっぱいあると思います。先生は手話で関わっておられるのですか？（質問者 ……）そのお子さんは勤がよくて、アンテナを張り巡らして、多分先生はこうおっしゃっているのだろうと想像してやっているのですね。自分は想像してやっているよ、とは言えません。先生に褒められるし。一度手話でしっかりコミュニケーションして、今まできき渡らしていた、わからなかったところが、手話ではこんなにもわかると理解すると自分は何者かがわかると思う。自分はきこえる人間と思っていると思います、このままいくとかわいそうです。

河崎／

一般の学校にインテグレーションされているのですね。

時折、わかっていないということに気づかせてあげる支援が要るかもしれません。他のお友だちはこれだけの内容をききとっているけれど、あなたは全部は聴こえなかったよね、そりゃそうだよね、というように、聴こえてないことを確認していくことが大事な支援だと思います。

南村／

以前、パソコン通訳の会を立ち上げて大学生に情報保障をしていました。その時、ずっとインテグレーションをして自分は自分の力でここまで来たという聴こえない大学生がいました。私たちは頼み込んでパソコン通訳をやりました。90分の教授の話をパソコン通訳したら、終わった時に彼は「僕の18年間を返してほしい、こんなに情報があると知らなかった」と言いました。その人が得た情報がすべてだと思ってしまう。そのお子さんもそうだと思います。他の子が話していることがわからなくても、何ら不思議に思わない。他の子どももわかっていないと思っているのです。片耳難聴の人は、全員片耳難聴だと思っているみたいですよ。本人がわかりづらいという所があります。そこが難しい所です。

河崎／大切な質問をありがとうございます。

私は大学に勤めていますが、インテグレーションで育ってきた学生たちのほとんどが、18歳でノートテイクや手話に出会って、きこえる人たちはこんなに多くの情報がある中で普通に生きてきたのか、賢くなってきたのかと知り、傷つきます。ノートテイクがついて、パソコンテイクがついて、最初の嬉しさはつかの間、むしろ無念さに傷つき、育ってきた大切な時間を「返してほしい」と言います。

南村／

少ない情報の中で生きてきた、返してほしいと言わなくてはならないそのような子どもにしたくない。

E／

他県のろう学校から来ました。娘がろうで2歳で通っています。幼稚部の親御さんに口話法の学校と手話を教える学校があると聞きました。どちらがいいのかと悩んでいます。選択基準を伺いたいのと、母子分離の学校と親が付き添うの学校もありますが、それもどちらがいいかということも伺いたい。

南村／

口話を選ぶが手話を選ぶかということに関しては、聴こえない・聴こえにくい子どもにとって、どちらの場所にいた方がわかるかが基準です。分かる環境にいることが人間としての一番の幸せだと私は思います。子どもがわかる環境を用意してほしいと思います。母子分離に関しては、その学校の方針があり、なぜ母子分離か母子一緒かのところだと思います。一般的に手話を共通のコミュニケーション手段として使っていれば、きこえる子どもと同じ保育ができるはずです。きこえる子と聴こえない子の違いは、コミュニケーション手段の違いだけです。それならば手話を使えば、親が通訳でつく必要がありません。昔は聴覚口話でAちゃんが〇〇と言ったよ、Bちゃんが〇〇と言ったよと親や先生が通訳をしていた。あんな馬鹿なことをなぜしていたのだろうと思います。手話なら本人同士で十分コミュニケーションができます。幼稚部さんくらいになると、かえってこちらが読みとるのが大変なほど深い話をしています。子ども中心に考えていただきたいです。

河崎／

今は乳児期から手話のある環境で子どもたちを育てているろう学校も、かつては手話を遠ざけていた聴覚口話の時代があり、お教室の後ろにずっとお母さんたちが座っておられました。手話が導入されるようになって、子どもたち自身が先生の言うことがわかるようになって、お母さんたちは教室に付き添わなくていいですよとなりました。でも、手話を選んだら聴覚は使いませんとか、口話はしませんとか、人工内耳ダメですとかいう問題ではありません。生活言語として手話をまず保障して、全部わかる中で生活するという事ですね。手話によって、小さい時から「わかって、伝えられる存在」になり、日本語を習得し使えるようになる手段として、子どもに合わせて、これまで工夫されてきた口話訓練、日本語学習のあり方が生かされる。口話を使える子も、役に立てられる子もいます。しかし、それと手話を遠ざけることは別だということをお話くださったのだと思います。

南村／

大塚ろう学校ではペラペラしゃべる子はたくさんいます。でも手話を使っています。共通言語は手話です。みんながわかる言語は手話なのです。人工内耳装用児でもしゃべるけど必ず手がついています。何でも使えるのが一番です。でも子どもによっていろいろです。

河崎／

今日は他県から来てくださって、ありがとうございました。

さあ、時間になりました。最後のディスカッションでもお分かりいただけたように、南村先生とは長いおつきあいで、先生のお話を何度も伺ってきましたし、私の話も先生にきいていただいてきました。今日お伺いできなかったことも、これからの取り組みのなかで保護者の方々と分かち合っていきたいと思います。今後とも、どうぞよろしく願いします。

南村先生、本当にありがとうございました。

(拍手)

自己肯定感を育て、ことばを育てる

— 手話も日本語も —

講師 木島照夫 先生

(東京都大塚ろう学校早期相談員、全国早期支援研究協議会事務局長)

木島照夫(きじまてるお)先生は、大学院で心理学を専攻された後、公立の教育相談室、都立養護学校勤務を経て、40歳でろう教育に出会われました。その後、30年近くにわたり、東京都立ろう学校の教員として主に小学部の教育に携わられました。幼稚部・小学部に手話を導入することの重要性を早くから訴え、新生児聴覚スクリーニング検査の普及と共に、その関心は乳幼児期へと広がりました。2003年に全国早期支援研究協議会を立ち上げ、事務局長として活躍。さらに、聴覚障害児に対する日本語文法についても実践的な研究を重ね、2011年には難聴児支援教材研究会を創設。代表として、次々と魅力的な教材を作成されました。2016年より東京学芸大学非常勤講師。好きな言葉は“手話は人生を楽しむために、日本語は人生を闘うために”。その思いをこめて、早期に手話と出会った子どもたちが日本語を習得していく姿を伝えていただきます。

はじめに

皆さん、こんにちは。ろう教育は30年位してきました。その中で学んできたことをお伝えしたいと思います。

自己紹介も含めてお話します。1989年に当時の養護学校から、ろう学校に変わりました。当時は都内に6校のろう学校がありました。その中で1つだけ手話を使う、足立ろう学校というところに異動になりました。手話を使うろう学校ということで、他の5つのろう学校からはさげすんだ目で見られていました。例えば、ろう学校の先生方が集まる研究会に参加して、私が発言をしても何事もなかったかのように別の次の話が始まるという、つまり無視されるような時代が実際にありました。手話だけでなく、手話を使うろう学校の教育も含めて、偏見・差別的扱いをされる時代がありました。

当時はろう教育は日本語を身につけるために聴覚口話法でやるろう学校が当たり前で、それに乗ることのできない子供たち、例えばろう重複児は口話法のろう学校にはなかなか入れてもらえませんでした。「足立ろう学校では手話を使っているからそちらに

行ってください」と紹介されて、「〇〇ろう学校から断られて」と電話をかけてこられることがありました。ろう重複の子どもも含めてろう学校を居場所として重複の子どもたちも育てていました。その当時のことを本に載せました。（「聴覚障害者の心理臨床」）

口話法で聴覚障害者がちゃんと日本語を身につけたかということそうではありません。これは東京学芸大学の澤先生にお借りしたデータですが、1970年代から2015年まで半世紀にわたる読書力検査の結果です。語彙力・文法力・読解力の検査で、横軸が実際の学年、縦軸が読書学年でだいたい4年生くらいで限界になり、9歳の壁と言われています。そこが超えられないというのが、日本の聴覚障害児教育のひとつの現状です。

2003年に足立ろう学校から大塚ろう学校に異動になりました。その時、「なぜこんなに通じないのか」と思いました。手話を知らないだけでなく、少し複雑な話題や時間・空間を超えた話になるとなかなか通じないという実態があり、これでは勉強も遅れるだろうと感じました。子ども同士のコミュニケーションも、口話でやっている所以他愛のない話しかできない。実際こういうことがありました。当時の校長からきいた話ですが、統廃合前の都内の各ろう学校で、小学部高学年と中学部で学力テストをした。校長会が学力の把握をしたいというものでしたが、結果は手話を使っている足立ろう学校がダントツに高かったというのです。だれも予想もしていなかったし、口話法でやってきたので、手話に負けるというのはある意味屈辱的な結果だったのです。結局、その結果は公表されず、テスト自体やらなかったということにしたということです。実際の数値も私は見せてもらいました。

1. なぜ、手話でスタートするのか？－「自己肯定感」をもっていきるために－

今、新生児聴覚スクリーニングが行われるようになりました。お母さんは赤ちゃんが生まれて喜びが頂点の中、もしかしたらきこえに障害があると伝えられた時のお母さん方の辛さは想像に余りあります。きこえるお母さんのほとんどの方が奈落の底に突き落とされるような思いをされたと思います。しかし、この悲しみは子供にはどのように映っているのか。イギリスの精神科医ウニコットが「赤ちゃんがお母さんを見つめるとき、赤ちゃんは2つのものを見えています。お母さんの瞳と、お母さんの瞳の中の自分を見つめるお母さんと」といっています。つまり子どもはお母さんの気持ちが自分を見ている眼を通してわかるということです。お母さんが自分のことで悲しんでいると知るとは、子どもにとっても悲しいことです。ぼくはなぜここにはいけないの、私とお母さんとの出会いは悲しいことなの、と。きこえない子たちは大きくなった時、この問いをもう一度お母さんにします。知的障害をもっていてもそれは同じです。言葉は言えないが知的障害があればあるほど小さい時から思いを感じ取っていたと思います。子どもは「なぜきこえない子に産んだの？」と問います。この問いかけに戸惑うし、ほとんどのお母さんは泣きますし、子どもにあやまります。「きこえない子に産んでしまってごめんね」とか「お母さんの耳と代えてあげたかったよ」などと。その時、子どもは2つの

複雑な感情を味わっています。1つはお母さんはここまで愛情をもって育ててくれたと感じます。もう一方、お母さんは自分のことを悲しい存在だと思ってきたのかな、ということ。これにどのように答えるのか。決まった答えはありません。この問いにどうこたえるか？お母さん方にはこれから考えていていただきたいなと思います。

話を戻しますが、障害を告知されてきこえる親御さんたちは、「この子たちとはもう通じ合えないのじゃないか」と思います。その思いを持って私たちのところに来られます。その時、子どもと通じ合うために私たちは手話を身につけましょう、とお勧めします。そこから手話の学習がはじまります。大事なことは、直接きこえない人から手話を学ぶことです。きこえない人と出会うことで、きこえない人にとって手話はかけがえのない言葉だとわかりますし、同時にきこえないということがどういうことなのか、ということその人から直接学べます。その過程で親御さんたちも徐々に変わります。悲しみは安心に変わります。手話の先生はきこえない人で冗談が好きで明るい人だということもわかります。我が子の将来をその人に重ねて見るようになります。そうすると我が子を見つめる眼差しも変わってきます。あのように育っていくのか、それなら大丈夫だと思うようになります。親御さんが前を向くと、子どもにも伝わります。僕はこのままで大丈夫なんだと、自己肯定感が芽生え始めます。子どもはお母さんと一緒にいることが喜びになり、一緒に物事をやりたがるようになる。どこにでもあるような普通の親子関係が作られ、子どもはお母さんの膝を安全基地にし、外の世界に働きかけいろんなことを知っていくという発達過程をたどります。そこに手話という言語が加わっていくということです。手話を使ってスタートすることが、お母さんの心理的不安も解放し、そこで得た安心感から子どもともいい関係が作れる。きちんと関係が作られて子どもと遊んだり、生活するのが楽しくなれば、そこから子どもは変わっていきます。そこがスタート地点だと思います。

◆子どもと一緒に遊ぶことを楽しめる事例

例えば、子どもと身近なもので一緒に遊ぶことを楽しんでいて、スカートのベルトを引っ張ったら子どもも引っ張る。そして引っ張りっこをする。同じレベルにたって遊んで楽しむ。雑誌を一緒に破る。共感的な関りをする。その中からお母さん、子ども、物との3つの関係ができる。これが言葉の発達への橋渡しになります。専門的には「三項関係」といいます。自分とお母さんと物ですね。生活すべてを一緒にやる、それを伝えるのが大事になります。生活すべてを一緒にすることによって、子どもはいろんなことを知ります。それが世界を知る最初のステップになります。

◆生活の”全て”を一緒にやり、伝える事例

例えば、朝起きて「おはよう」と言った後「カーテンあけるよ」とやると「カーテン」、「着替えるよ」とやると「着替え」、「ミルク作るね」とやると「ミルク」とお母さんがやる手話を同時に真似ます。買い物に行くとき、家を出る前に「Tストアに買い物だよ」とやり、その時にTストアの写真カードを見せて予測させる。何回もしているとだんだん子ども

の中にもイメージができてくる。「Tストアに着いたよ」とやると写真を指差して、子どもは「あ」と。次に店の看板を指さして「あ」という。照合しているわけです。「同じだね、Tストアだね」としていきます。

きこえる子ではいちいち意識はしませんが、きこえない子どもには情報を100%伝えることが子どもが伸びていくためには絶対必要なことです。どういう風に伝えるかという、そこは手話を使っていくということです。手話は子どもが見てわかりますので。子どもとの楽しい関係、遊び、生活の環境を整えるときこえない子どもだけでなく、きこえる子供も語彙の力、読解力という日本語、国語力が伸びるという研究があります。内田伸子先生がたくさんの子どものサンプルを取って調べました。“共有型しつけ”と言いますが、一緒に楽しい時間を過ごし、子どもと喜べそうなことをいつも考えるお母さんと過ごす自然と語彙力、読解力がついてくることが研究結果として出てきました。ポイントとしては、①経験を共有することを楽しむ、②子どもに考えさせ判断させる、③子どもと一緒に本をよく読む、の3つです。その研究結果から言われていることは、『50の文字を教えるより100の「なんだろう？」を育てよう』。子どもが「なんだろう？」と興味を持つ世界を広げ育てることが大切。一番ベースに必要なことだと思います。

【事例】手話で育ったEくん、聴力は100dBで現在小3。

手話を使い始めて、10カ月で「くつ」と初語で表した。お母さんが全部手話をチェックした表です。お父さんはアメリカ人でASL、お母さんは日本人でJSLを使い子どもはごっちゃで使っていた。

1歳3か月の時お母さんがチェックしたのですが、理解する語彙数が100あったそうです。面白いお母さんでグーとパーで赤ちゃんができる手話を8つくらい考えた人です。

その子が1歳3カ月で、おばあちゃんと出かけた時、いつもの花屋さんの窓辺に飾っている熊のぬいぐるみのことを、おばあちゃんに話しかけるんです。最後に「おばあちゃん・あそこ・熊・ある」という発語がありました。

彼は幼稚部に入るまで手話でした。幼稚部に入ってから少し日本語も教えたほうがいいんじゃないかということになりました。子どもは魚の図鑑が好きで見入るようになった。年長になったある時、タブレットも自分で見るようになって、品川水族館を出して「さかなクンがくる」ということで、お母さんと出かけた。そこでさかなクンがクイズを始めた。大きな模造紙に絵を描いて「この魚が分かる人？」ときいた。だれも分からず彼だけが手を挙げた。お母さんはびっくりして「本当に知ってるの？」という「知っている」と。前に出て行って指文字で表したがお母さんも知らない名前で、何度も読んでさかなクンに伝えました。その名前が「ふさぎんぼ」。さかなクンは「ぎょぎょぎょ！よく知ってるね」といつてくれたそうです。その魚の絵に名前を入れてE君にプレゼントしてくれたそうです。そのことを通しているんな読む力をつけていきました。

年長さんになった時、食堂の掲示で『今日は運動会に向けて力をつけて欲しいので、とりにくの「てりやき丼」にしました』と書いてありました。それを読み取ってE君は先生に「今日の給食のとりにくは食べると筋肉になるんだって。明日の運動会で速く走れるように、栄養士の先生が考えてくれたんだ。だからおかわりするよ」と手話で伝えた。この時担任はちゃんと日本語も読めるんだなと思ったと言っていました。

年長の時の日記をお母さんにお借りしました。文章は短いです。シンプルですが、文が4段落の構成になっています。『きょうから9月。なつやすみはおわりです。あしたからきゅうしょくがはじまります。なつやすみがおわったかんそうは？やだー』と書いてあります。書かれた文を読むとき、ぴたっとはまるのは4段落の構成ですね。起承転結と言いますね。あるいは、「はじめ・中1・中2・まとめ」で書くのが一番文としてはまとまりがいい。

年長の時には、品詞の分類もしています。動詞の活用もしています。例えば『おおきなせいまいきの あるところ』と書かれています。日本語の特徴として修飾語は全部前につきます。これが日本語の難しいところです。例えば“難しい聴覚障害児の教育”という時、難しいのは「聴覚障害児」なのか「教育」なのかこれだけでは分からない。文脈の中で判断するしかありません。英語だと関係代名詞を使って後ろで説明します。しかし日本語はそのような文法マーカ―はありません。そういうところを教えるということで“おおきな”・“せいまいき”で括って工夫をしています。

小1の時の本人が書いた日記の文章をたまたま見せてもらいました。『今日は、はじめてがっこうがありました。あたらしいきょうかしょをもらいました。とてもとてもうれしかったです。なかみは、こくごと、生かつと、ずこうと、ことばでした。ことばは、がっこうにおきました。』文章としては普通の1年生が書く文章ですが、助詞などの間違いがありません。4段落構成で書いています。お母さんと幼稚部の時にしていたことが身につけているのですね。小学校2年の終わりに読書力検査をします。読書力偏差値が69ありました。手話から始まって日本語はゆっくりとと思っていたが、ちゃんと伸びていました。手話を使う子はだいたい日本語の伸びはゆっくりで、聴力の比較的よい難聴の子より後で伸びて追いつくというタイプが多いです。

2. 手話は日本語獲得にどうつながるの？

手話は日本語とどうつながるかについて、30人位のお母さんにきき取りをしました。重複の子のお母さんがそのうち9人位います。“三項関係”が初語の出た重複の子も含めて全員ありました。言語獲得にとって人間関係が大変大切なポイントになるということです。もう一つは象徴機能。言葉というのは、例えば“新幹線”なら「し・ん・か・ん・せ・ん」という6つの音の連なりがあります。これは必然的な意味があるわけではなく約束事として決められている。その約束事が分かるというためには、手話というのはわかりやすい。物の一部を取って象徴しているものがあります。“新幹線”の手話は電

車の先頭部分の特徴を切り取って表しています。このような手話がたくさんあり、子どもにはわかりやすいです。

それからグーとパーを使った手話初語が圧倒的に多いです。例えば“おいしい”、“ありがとう”、“ごちそうさま”など8割くらいはグーとパーを使った手話で初語が出てきます。ですから、グーとパーを使った手話を最初に子どもと一緒にするというのはいい方法だと思います。

初語が出た25人全員、聴力に関わりなく手話の初語が出ました。ただ音声初語は聴力によります。90dBが分かれ目になります。聴力が軽めの子どもたちは初語がやすいし、聴力が厳しい子については同じような時期にはでない。ただ、手話に関しては全部出る。その意味でも共通の言語としては手話は有効と思います。

映像を見せます。7カ月になった子です。(映像)

何の手話かわかりましたか？大人なら“おわり”という手話を子どもなのでできなくて、このようにしています(手の平を見せて、少し握るような)。実は寝かされているところがフローリングで固い所なんです。それが嫌で終わりにしてほしいけど、ママがやってくれないので声をかけてくれた時に“おわり”とだした。でもママはしてくれないので、もう一度“おわり”とした。生後7ヶ月で初語がでるんですね。私たちきこえる人間は子どもが手話・サインをだしていても見落としていることが多いかと思います。きこえないお母さん達は読み取れますが、そして、重複の子どもはもっと読み取れない。私たちが使っているのと同じ手話とは限らないので、わからない手話を表出しています。そこをちゃんと読み取ってもらった時、子どもは満面の笑顔で答える。そういう環境を整えると子どもは変わる。ですから赤ちゃんのいらっしゃる方はサインを見落とさないでということです。

手話を獲得した後、言語獲得はどのように進化していくのか。きこえる子どもの場合です。研究数はそんなに多くないですが、半世紀くらい前の研究で大久保愛さんが自分の子どもの語彙数を全部チェックしたものです。語彙数が2歳で300ちょっと。手話を使うとこのくらいです。3歳で1000、4歳で1500、6歳で3000。この3000を基準にして、かつてろう学校が語彙表を作っていた時があります。3000くらいあれば教科学習は十分できます。こんなに獲得できなければダメというものではありません。アメリカの研究では18歳で4万語とあります。年数で割ると、速度がだんだん早くなっていくのがわかります。計算してみると、私たちは毎日6.5~7語くらい獲得していることになります。意識的にではなく自然に耳からきいて獲得している。ではなぜどんどん速くなるのか？

きこえない子どもたちはこれまで言葉の概念の豊かさにかける、と言われてきました。たとえば“リンゴって何？”ときかれた時、“赤い”“丸い”、“食べる”ぐらいはきこえない子どもでも答える。それ以上に例えば、サクサクした食感、妹が好き、スーパーで売っている等のリンゴについての説明ができるか。その言葉を持っていないとよく言わ

れてきたわけです。たしかにきこえない子どもは、物や物事の内容を説明する言葉が少ない。それは概念を持っていないのではなく、手話や日本語を使ってうまく説明できないとか、説明する日本語がわからないということが非常に多いと思います。リンゴってどんなものときかれた時に、説明する言葉がどれだけ浮かぶかは、生活の中でリンゴに関する経験をどれくらいしてきたか。その経験をどれだけ子どもの頭の中に意識化し、言語化し、記憶されているか。そのため1歳前から生活の中で買い物に行く前に写真を見せて「これからスーパーに行こうね」と話しかけをする。どれにしようか、お金を払おう、とか一緒に経験をし、家に帰ったら持たせてみて「つるつるしてる」とか、「ずっしり重いよね」というような言葉がけをし、長く皮をむいて「長いね」、切って「種がある」という経験をさせる。経験をさせながら子どもに言葉、1歳でしたら確実な手話で語りかける。それが記憶されているかどうかということですね。

きこえない子のもう一つの課題は語彙量が少ない、とくに抽象語彙が少ないと言われてきました。小学校の低学年の単元で、言葉の上位概念・下位概念は必ずでてきて学習します。この単元でつまづく子が多い。言葉がどのように積み上げられているかを学びます。みかん、その上が野菜、お菓子、その上がたべものという概念。赤ちゃんが最初に覚えるのは基礎語。その下には下位の概念があり、リンゴにもみかんにもそれぞれの種類があります。でも赤ちゃんは「これ、“あかね”だね」とか「“ふじ”だね」と覚えるわけではなく、「りんご」として最初に覚えます。きこえない子どもは小学生になった時、基礎語はわかるが、その上のくくりのことばわからないことがあります。“くだもの”とか、その上の“農産物”とか“植物”にまとめることばがわからない。このあたりの言葉になると抽象語彙です。抽象語彙は知らないという子がたくさんいます。抽象語彙の中にたくさん基礎語の名前や物の概念が下から積み上がって、いっぱい詰まってまとまっている言葉として“農産物”というのがあるわけで、下からの積み上げがすかすかだと、農産物自体がわからなくなります。そのため最初の基礎語のレベルから積み上げることが大事になります。1歳ごろから音声言語では耳から入っても音の塊としてしか認識できない。きこえない子どもの場合は音声言語では積みあがりにくいですが、手話は100%見える言語ですから、そこが積み上がる。

では私たちはどうやって、この膨大な量の構造をもった語彙を獲得できるのか？例えば犬を見て“犬”という言葉のカテゴリーを作ります。例えて言うなら、子どもの頭の中に“犬”というファイルを作ると考えてください。インデックスが“犬”となります。次に猫を見たら、犬のファイルしかなければ、猫を見ても犬という子はいません。その時、「あれは猫だよ」と教えられて、猫のファイルを作ります。この作った時点で実は犬というファイルも上書きされています。猫を知ったので、犬だけしか知らなかった時の犬の概念よりは、鳴き方など犬と猫の違いの新しい概念が加わるからです。言葉が増えるほど新しい言葉と照合されて、どんどん上書きされるわけです。そのうち動物という言葉を知るようになる。次に新しいものに出会う。例えばオカピを初めてみた時、あれ

は動物らしいと判断し自分の持っている動物ファイルと照合する。そして「これはオカピーだよ」と言われれば新しいファイルがすぐに作られる。これを瞬時にやるわけですね。新しいものをすぐに覚えていけるシステムが頭にあり、“即時マッピング”といい、すぐにマップの中に位置づけることができる仕組みです。そういう仕組みがあるから、きこえる子どもは2歳前後から、「語彙爆発」というものが起こります。どんどん言葉が増えます。語彙爆発が起きることは語彙が増えていくことの大事な要素ですが、では爆発がどういう風に起きるのかをお母様方からいろいろきき取って調べてみると、手話はある程度獲得すると、そこから爆発的に増えていきます。これが手話のひとつのメリットになります。頭の中に50個位ファイルが作られれば、それらのファイルとの照合でどんどん新しいものを取り込むと言われており、手話はそれができるとわかりました。きこえる子どもの研究データも出ていますが、やはり手話は早いです。そして語彙爆発も起こる。

(スライド1) これは「手話の即時マッピング」をした例です。1歳1ヶ月の時お母さんと踏切に行き、その場で踏切を覚えた。1歳4ヶ月の時、車に乗っていて“雲”“バス”“ショベルカー”“踏切”といろんなものを見ながら、全然別な踏切ですが手話でお母さんに伝えた。1歳1か月の時、踏切を見て、踏切の概念が頭に入り、その概念と照合して別の踏切を見ても、同じ踏切だと判断したわけです。

3. 手話から日本語へ ―日本語獲得の時期は？―

音声言語の場合の語彙の爆発はもう少し遅いようです。初語が出ていても、爆発が起きるのは2歳以降。“犬”なら音が“い・ぬ”と100%弁別できるようになるのが言語獲得の条件なので音の塊としてしか認識できないそれ以前は難しいようです。日本語獲得にはタイプがあり、(スライド2)聴覚活用できる子どもたちは、音声で2歳くらいから使えるようになります。聴力が厳しい子どもたちは手話が中心になります。2歳くらいから手話の延長で例えば「き(指文字)+先生(先生)」などと使えるようになり、指文字の一音一音がわかるようになるのは3歳くらいです。聴覚活用ができる子どもたちは日本語獲得にとっての有利さがあり、単語を手話で獲得していれば、その手話と音声とを結び付けることができます。「バス」と手話で覚えていれば、音声で「バス」と覚えたら意味は手話でわかっているので、そこと結びつける。記憶されるのも早い。これを「記憶の二重符号化」といいます。音声だけで曖昧な状態では頭の中にことばのファイルは作れないので、手話でファイルを作って、あとで音声と結びつける方が日本語獲得には有利だと言えます。手話をしたら日本語ができないのではなく、手話をやった方が日本語ができると言えます。

これが聴覚活用タイプの例(スライド3・4)ですが、やはり2歳くらいから語彙の爆発が始まっています。2歳くらいになると「あれはなに？」と質問することが多くなりますね。

指文字タイプの子どもは(スライド5・6)日本語の音韻、「カルピス」ならその飲み物と指文字の「か・る・ぴ・す」が結びつくのが3歳ぐらい。そのころから日本語の獲得がだんだんと始まります。指文字タイプの子どもたちも語彙の爆発があって、だいたい3歳過ぎてからだんだんと「これ何？」と日本語の名前をきく子どもたちがいます。

日本語の音韻が順番に覚えにくいタイプの子もいます(スライド7)。これに有効な方法はなかなかなく、一つは繰り返しです。きこえる子は繰り返しきいていて、1つの言葉に800回きいているとも言われます。きこえてない子が同様に800回、たとえば「りんご」という言葉をきいたかという、そこまで多分きけないでしょう。きこえる人は暗やみでも後ろからでも人の話し声やテレビの話がきこえるので、それだけの情報量の違いがあるので、きこえない子にはやはり視覚でするしかない。100%弁別できる指文字や文字を使うということです。

(スライド8)次の例ですが、この子も手話で育ち、年中くらいから手話を日本語に結び付けていった子です。日本語と手話とのあいだを行ったり来たりした方がいいよねと担任に言われ、だんだん指文字を使って言葉を増やしていきました。例えば「学校に行く」場合には「学校」(手話)／「に」(指文字)／「行く」(手話)／「い・く」(指文字)のようなやり方をしながら、日本語の獲得を少しずつ進める。今、この子はろう学校の高3になったと思います。

日本語の音節・音韻・文字が並んで日本語ができているということを知らなくてはいけないので、その時の遊び。指文字表を貼ったり、プリントを使って文字を書くとか、「あ」のつく言葉集めや、最後に「か」のつく言葉集めや、しりとりあそび、音遊び。例えば「つくえ」の「く」がなくなったら何になるとかという遊びをするといいと思います。さかさことばもいいですね。頭の中に文字を思い浮かべないとできません。あとは手話の音韻を使ってする遊びもあります。手話のしりとりです。日本語は子音と母音で成り立っていますが、手話は、手の形と手の動きの方向、手の位置、手の平の向きでなっています。例えばじゃんけんのチョキを使って、チョキの形でできる例えば「切る」→「会社」→「間違い」→…などとやっていく。このような手話のしりとり遊びをすると手話の言葉も増えます。

日本語の文がなかなか覚えられない子は、二語文くらいで覚えていくのがいいです。一文暗記というのを幼稚部時代にします。「りんごをたべた」というのを家で覚えて、次の日、学校に行って「りんごをたべた」と書く。これを毎日やると日本語の文がだんだんと増えていきます。継続が必要です。

4. 「ことば絵じてん」を作ろう！ ―オリジナル・子どもと一緒に―

次は「ことば絵じてん」を作ろうという話です。ことばのカテゴリーが少ない子どもたちは頭の中でことばを整理することができないので、視覚的にカテゴリーを表すような「ことば絵じてん」を作る活動をします。これはお母さんが作って与えても意味がありま

せん。子どもと一緒にいろんな活動の中で作る。頭の中で作ると先ほど言った言葉のファイルを実際に紙の上で作るのです。

まずルーズリーフとインデックスを用意します。そしてチラシ、カタログ、絵の中に値段等が入っていないものを集めます。それを切って貼らせる。野菜をいろいろと貼って、「やさい」のインデックスをつける。

好きなキャラクターのページや行った遊園地、押し花、回転寿司など。メニューに合わせて入れ替えができるもの。ホットケーキを作った時に使ったもの。包丁は取り外しができて遊べる。

カテゴリーは決まっているわけではなく、いろんなカテゴリーで集める。例えば「りんご」は「くだもの」という名前のつけられるカテゴリーで分けられますが、「赤いもの」という名前の付けられないカテゴリーもあります。

学校でもカテゴリーでまとめていくという活動をよくやりました。「冬」というカテゴリー、工作活動した時の活動を「道具」や「材料」、「あるく」につながるオノマトペをつなげたカテゴリーなどです。概念カテゴリーをつかうワークや、概念カテゴリーやルールを発見する力をつける教材もあります。このように概念の広がり豊かにするには連想ゲームがあります。「サテライト型」の連想ゲームは、バナナと言ったら黄色いとか、皮があるとか、バナナについて思いつく言葉をいう。バナナにつながっている言葉というのはバナナを説明する言葉にもなっています。それから「芋づる式」の連想ゲーム。昔、マジカルバナナってテレビでありましたよね。ライオンと言ったら強い、強いと言ったらお父さん、というような言葉から連想する言葉。連想ゲームをたくさんすると、関係する言葉を広げていくことができます。

このような活動をすると、言葉には仲間、カテゴリーがあることがわかるようになる。重複の子どもさんでも自分の伝えることがわからなかった時、自分が作ったことば絵辞典を持ってきて、絵を示して伝えるようなコミュニケーションのカードみたいに使うことができるようになります。

言葉はいろんな切り口で仲間づくりができるので同じ言葉でも別のカテゴリーで作れます。このような活動の中で関係を考える力が育ちます。抽象的な思考は、何かと何かの関係性を考えることができる力です。日本語でも、比較する言葉「～より」、位置を表す言葉「～の上・中・下」、受動文と能動文「～れる・～られる」など、何かと何かの関係を表す表現です。きこえない子はここが難しいので、関係を考える力を育てるとよいです。

5. ことばで考える力をそだてるために ーことば遊び&やりとりの工夫ー

幼稚部の年中・年長になったら、ことばあそびをたくさんするのがいいです。

なぞなぞもいいです。まずこの場に答えがあるものをする。たとえば「座るとらくちんなものは？」「いす」です。答えが目の前にあるとやりやすいですね。その場になくて

も「冷たいお菓子何?」「アイスクリーム。」「アイスクリームって何?」「冷たいお菓子」という関係になり、言葉遊びから言葉を説明する力が育ちます。

あとは論理的に説明する力。日本語だけは出来ていても、言葉を使って考える力が育たないと学習面では難しくなってくる。思考する力を育てるには、時々子どもに質問することもよいです。「あれしなさい、これしなさい」といった日々の生活の中だけの言葉がけではなかなか考える力は育たない。そこにもう一歩プラスして、「どうして毎朝顔を洗うと思う?」「でかけるとき何故カギをかけるの?」「牛乳ってどうして冷蔵庫に入れないといけないの?」と子どもに考えさせるやり取りを加える。それによって子どもに言葉を使って考える力が育ちます。例えば「どうしてそう思うの?」などの疑問詞を使うとか、時間経過「始めに」「次に」と順序で話をする練習とか、「もし〇〇ならどうなると思う?」とか、接続詞を使うなども必要です。日本語の場合、単語で会話ができてしまう。その人との共有する話題であれば、「行ったの?」「行ったよ」「どうだった?」「面白かった」みたいな単語だけの会話ができてしまいます。周りの人は分からない。「やったの?」ではなく「学校の宿題はもうやったの?」と文にすることが必要です。それから子供と一緒に近所や園での出来事を話し合うとか、家族の話がリアルタイムでわかるように家族の中でのコミュニケーション手段に配慮する。これはすごく大事だと思います。きこえない子供はきこえる家族同士の会話はわかりません。父母が話していること、お父さんと兄弟が話している会話は見ることはできません。そこから得られる情報はないです。きこえる子どもは下を向いても話は入ってくるので情報量は全然違います。私がろう学校で教えていたある子供が「先生、ぼく幼稚部からお母さんとよくタクシーに乗って帰った。でもひとつ不思議なことがあった。どのタクシーに乗っても僕のうちを必ず知っていた」というんです。おかあさんはタクシーの人と口だけで話をして、子どもは横にいるだけだからわからなかったわけですね。だからすごく不思議だった。お母さんにきけば答えてくれたらと思うが、子供もきかないし親もあえて説明しない。でも皆知っているといた「いちいち言語化しない知識」が世の中にはいっぱいあります。それを知らないままに育つから、成人してから「常識がない」とか、「空気が読めない」などいわれてしまう。そうではなくて、小さい時から100%情報が保障されなかったから知らないということです。どれだけ情報保障が大事かということです。

これは(スライド9)小学校1年生で出てくる言葉で算数に関するもの。この言葉でつまづく。知らない言葉がいっぱいあります。その言葉をきいてもイメージがわからない。ですから算数をやりなさいではなく、生活において数に関する言葉を使うのが大事だと思います。

6. 絵日記を書こう！ ―子どもが主人公の(絵)物語―

絵日記について。ろう学校などに通っている方は、絵日記を書きなさいと言われるすが、どうして書かないといけないか説明されずに書いている人が多いと思います。そう

すると書くことがないから嫌になっちゃう。嫌になったらやめて遊んだらいいです。その時、体を動かす遊びをやってもいいし、ことば遊びをやってもいい。そしてやったことをかけばいい。絵日記は毎日書かなくてはいけないものではありませんが、その子にとっては自分が主人公になるひとつの物語、自分の世界なんです。自分の世界だから好きだという子もいます。それだといいが、お母さんが義務となってしまうと楽しめなくなる。そこで楽しんでする方法を紹介します。

(スライド 10) 初めは簡単な絵を描いて、それに単語か二語文をつけることから始めます。

絵日記から話はずれますが、文字の世界に導入する時、カレンダーを家に貼ってますか？日めくりカレンダー、月カレンダー、1年まとまったものなどが必要です。また小さいものを円形に貼るなどする。また家に連絡ボードを作ると、兄弟がいるとき便利だし、子どもにメッセージを伝える時子どもが見るので使うといいです。

(スライド 11)

最初の日記は二語文で「かさをわすれた」みたいな、その日の印象に残ったことをかきます。

空欄にしてそこに子どもが何かをかく。子どもと一緒に子どもが幼稚部であったことを家に帰ってから書く方法もあります。

次は(スライド 12)年少のお子さんですが、うまく整理されています。はじめに活動のテーマ、活動の手順、子どもの感想を書かれています。1つの活動を要領よく手順としてまとめています。これは大事なことで、社会に出て企業で業務報告を書かなくてはいけない。それがなかなか書けない人がいます。手順としてどのように書くのかを学ぶ場にもなっていると思います。

次は(スライド 13)文法的に、助詞に○をいれ、動詞は緑でくくるなど視覚化しています。

次のスライドでは(スライド 14)歩き方がでてきています。ゆっくりあるく、あるく、はやあるき、こぼしり、はしると絵を描いてわかりやすくしてあります。

(スライド 15)

動詞を空欄にしている。左のものは4段落で一つの文がうまくまとまるように書いてあります。このようにまとめると読みやすいです。空欄のところに子どもに書かせています。

(スライド 16)

手話の絵を入れている人もいます。比較の言葉を使っています。「～のほうが」など、こどもに教えたい言葉があり、場面に応じてこの言葉を使おうというものです。

(スライド 17)

年長さんになると接続詞や受動の文を使っています。

(スライド 18・19)

オノマトペは多く使うといいです。言葉の表現の仕方が豊かになります。ウキウキする、くるくる回る等使っています。

(スライド 20)

見たことばかりではなく「すい～すい～とタイヤが回る」のように、五感を使った表現を意識しながら入れていくのも大事です。

(スライド 21)

因果関係が分かるように、手を洗うのと、洗わないのとで、目をこすったらどうなるのかと漫画で書いています。ブスツとしていたら悲しいと思うし、おはようと言うと嬉しいよねと言うものです。

「カーテンを閉めた」「どうして？」というやりとりして、因果関係を書いています。

(スライド 22)

生活のことを書く。銀行のATMに行ったときのことですね。

(スライド 23)

漫画で描く。かける人はいいが、私はあまり描けません。漫画は4コマ漫画で起承転結になります。おもしろいです。吹き出しもいれて。人に見せるものではないので、絵が上手下手は関係ないので、この方法を使うのもいいかと。

(スライド 24)

子どもが見つけたことをかく。地下鉄の中には砂利はなくてコンクリート、外には砂利があることを発見したことを書いている。ダンゴムシを捕まえたことをかいているのもあります。見たことを書くことが大事。観察する力や仮説を考える等、科学的思考力の基になります。

日記が嫌だという時は、遊ぶ。ことば遊びでもいい、体を動かしてもいい、料理を一緒にしてもよい。

最後に

9歳の壁越えについてです。手話からだんだんと積み上げて、楽しい生活が家庭でできるようになり、子どもも親も楽しいとなると、次に日本語ということになります。日本語もだんだんことばあそびなどの楽しい中でやっていくと力がついていきます。4年、5年、6年生なりに伸びていきますので、手話で100%コミュニケーションを保障し、家庭で楽しいことを考えていけば、きっと皆さんのお子さんたちも成長していくと思います。

これで、話を終わります。

質疑応答

河崎／

お母さんたちが、「これら全部を、私たちがしなくてはいけないのかしら!？」と思われたのではないかと少しドキドキしましたが、いかかでしょうか？

何か尋ねてみたいことなどありましたら、どうぞ。

木島／

楽しく遊ぶことが基本にあれば、全部するのではなく、要素も入れながらそこで遊ぶことを考える

河崎／

きこえる子どもたちの場合は、日本語でコミュニケーションしながら育てて、幼稚園に送り出す、小学校に行かせるとなるときに、おかあさんはそこまでしなくていいですよ。でも、きこえない子の場合は、それでは難しいということですか？

木島／

家庭の条件があるので、みんなが同じようなことをやらなくてはいけないとはなりません。障害がある子はどこかを補うという部分が必ずあって、それはどういうふうにするのか。それはそれぞれの家庭の条件があり、働かざるを得ない人もいます。その中で出来ることをどうするかはそれぞれ考えて工夫していくしかない。

河崎／

それは、日本語で自分の考えを伝えられるようになる時の工夫ということですよ。手話という言葉に出会って、手話で説明されれば何でもわかる子どもたちが育っていくとき、手話において論理的思考が可能になると思います。ただし、それを日本語で書いて表すことができるかという別ですので、その部分が、木島先生が力を込めて話してくださいましたことですね。

講演の後半は日本語の話になっているのに、どうして手話で始めることが大事と言っておられるかという、まず手話で説明できる、説明してもらったらわかることが大事ということですか？

木島／

そうです。だから、きこえないと発見された時から手話を使っていくことが大事ということ。その上で、日本語を学ぶという点においては、大人がかかわることが必要だということ。です。

河崎

それはお母さんではなくて、学校の先生でもいいわけですね。手話でやりとりし、しつけもできる子に育ちました。手話が通じるろう学校の幼稚部に通って、先生方から教えてもらってもいいわけですね。

木島／

もちろんそれはあります。

それで、家に帰って子どもとのかかわりはどうするかということですね。忙しいお母さんなら、一緒に料理や掃除や洗濯をするということで補充していく。

河崎／

何か質問はありませんか？……

こめっことしては、赤ちゃんの時から手話に出会って、説明してもらったら理解できる自分、大人に助けてもらったらこんなにいっぱい手話で説明できる、伝えることができる自分を知って、3、4歳になると徐々に日本語とも結びつけることもできるようになる子どもたちを育てたい。そして、その子どもたちが学校に就学する時、どのように教育してほしいかは、おのずと子どもが求めていく。子どもたちを見て、それにぴったり合った教え方をしていきたいという動きになったらいいなと願っています。ですから、今日のお話をきいて、きこえないという障害をもつ子どもの親になった以上、こういう努力をしなくてはいけないのですと言われたような負担は感じないでほしいと思っています。

木島／

そうですね。E君という例を出しましたが、お母さんは日本語を教えるというのではなく、子どもとのかかわりの中で子どもが興味を持つものが見つかった。それをお母さんは認め、興味あることを「何というの？」とききながら支えているというか、そういう関係です。子どもは好きだからどんどん自分で進んでいく。だから50の言葉を教えるよりも100の何だろうを育てようということになります。

河崎／

かかわりのチャンネルは、そのお母さんのあり方、お母さんと子どもの関係によってさまざまにいいですね。入ってプレイフルになれる部分、遊べる部分はそれぞれ違うと思います。どの分野が得意かは異なるので、自分が子どもといて一番楽しくてプレイフルになれるチャンネルを、子どもと一緒に見つけて開いていってくださいということですね。ですから、講演の中で紹介されたお母さんと同じようにしていかななくてはならないということを、先生はおっしゃっているのではないと思います。

木島先生が子どもさんと接しておられる姿を見ると、子ども大好き！のオーラに包まれておられます。大人同士で話しているときは朴訥というか、少しシャイにも感じられますけれど、子どもさんとは、たとえそれがテスト場面であっても、いっしょにノリノリになって楽しむ先生がおられます。そこをお伝えしたいです。そういう先生です。

木島／

子どもとは素直にかかわれます。大人には構えてしまうところがありますね。

河崎／

先生の実践は、絵日記の指導でも、文法を正すときでも、子どもと向き合う先生は楽しくて愛にあふれていて、にこやかです。「ちがいます！」と怒ったり突き放したりするようなことはぜったいにありません。そのところをお母さん方に持ち帰っていただきたいと思っています。

木島／

僕から質問させてください。子どもに日本語を身につけさせないといけないと、すごくプレッシャーに感じているお母さんはおられますか？（挙手あり…）

そうしたお母さんには、私の話は余計プレッシャーになったかと。

A／

プレッシャーではなく、どんなふうにしていけばよいかという疑問がずっとありましたが、事例や実際にやっていることをパワーポイントでみせていただき、このようにすればよいのかとわかり、未来について不安ばかりでしたが、これだったら私にもできるかなというような例を見せていただき、こうすれば言語が習得できるんだと見せていただき少し安心しました。

河崎／

このようなルート・やり方があるという具体的な実践に出会えて、そして、最後のグラフはよかったですね。手話に出合った子どもたち、9歳の壁を超えているのが見えて良かったです。

木島／

もう一度まとめますが、やることは2つ。一つは楽しく遊ぶこと。楽しく遊べる環境を作る。楽しくないことはしない。それと褒めること。どうしたら楽しくなるかを考える。もう一つはきこえない子にとっては情報の点で欠けるので、きこえても、その場ではお母さんと子どもの間のやりとりでは文脈を共有しているからわかるが、いったん外に出て騒音状態になるとほとんど入らない情報と考えていいです。ですから、そういう時は、家族の会話を見ててやはり入らないので、できるだけ家族の中で手話を使えるようにするといいですよと言う話です。情報の保障と楽しいことを考えてください。

河崎／

最後のしめくくりの言葉を心にとめて、こめっこも子どもたちを待っています。いっぱい褒めています。楽しいことばかり考えています。中心スタッフであるユタカさんの毎日の生活は、月2回の土曜日のためにあるのだそうです。スタッフみんなで頑張っています。

最後に、木島先生に感謝の気持ちをこめて拍手をおくりたいと思います。

1

きこえない子の「手話の即時マッピング」

事例(1歳1か月) 即時マッピング

踏切で踏切の写真カードを取り出す。M「同じだね。踏切だね」と言うと実物と写真カードを何度も見比べる。遮断機のランプが点滅してバーが降り、電車が通るといちいち電車を指さす。通り過ぎると「バイバイ」とやる。バーが上がるとM「高いね」とやると一緒に真似る。帰るとき抱っこを乗り出して遠ざかる踏切を見ている。

家に帰ると、自分でもう一度踏切の写真を取り出して「踏切」の手話をする。



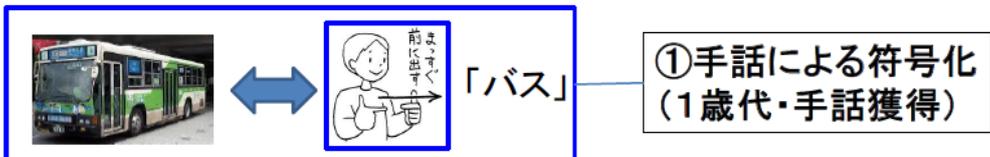
事例(1歳4か月) 一般基準の適用

車から「雲、バス、ショベルカー、踏切」など知っているものが見えると大喜びで教えてくれる。(1歳4か月)

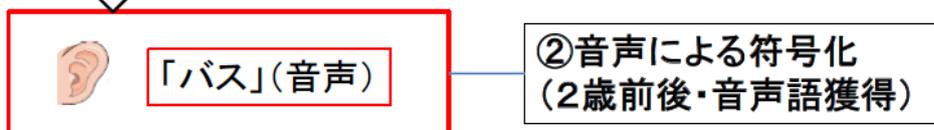
2

音声と手話との二重符号化

第1段階 ……最初に手話を先行して語を獲得



第2段階 ……手話と音声「バス」が結びつく



29

a. 聴覚活用タイプ (2歳前後～)

『鬼』の体験を学校、児童館、家と、たくさん経験したので、よく話す。S「オニ、〇〇だった…。」母「オニ、〇〇だったの？」S「うん」「オニ、ポンした。先生、Sちゃん、ポンした」等、長い文も話す。出てきたという感じ。(1歳10か月、40dB)

オムツ一丁で遊んでいたEがやってきて、「ズボン、はきたーい。」(手話+音声)。「Eのズボンはここにあるよ、これをはいたら？」と言うと、自分で履いていた。履けると、今度はズボンの前後を確認して私の顔を見る。「マーマー、ちがう？大丈夫？」。私が「大丈夫だよ、ちゃんと履けているよ。上手に履けたねえ」と手話で答えると「大丈夫ねー？」と言いながら満足そうでした。(2歳2か月 80dB)

音声言語「語彙爆発」は2歳以降？

手話と結びついた音声語が50語程度記憶されて以降か？

【事例3】(80dB) 手話+音声言語(50語)

☆固有名詞(2～3音節の人の名前)6語

☆名詞(「ママ、先生、おっぱい、あいうえお、おしまい、バイバイ、どうぞ、ちょうだい、オッケー、いいよ、大丈夫、ごめん、ありがとう、おい、おめでとう、耳、鼻、目、口、蓋、皮、順番、まる、ぼつ、」)24語

☆動詞・形容詞(「ほしい、大きい、同じ、違う、ある、ない、痛い、怖い、可愛い、冷たい、待って、青い、赤い、黄色、赤、ピンク、黒、白、遊ぼう、おいで」)20語 (2歳4か月)

【事例4】(80dB) 手話+音声言語

☆最近質問することが増えてきた。「木、葉っぱ、ロッカー、門…」片っ端から目にしたものを指さしできいてくる。(2歳3か月 H20. 11)

b. 指文字タイプ (3歳前後～)

手話の延長として指文字が使える(キ+先生)～2歳前後

指文字語(音韻の連続)と手話が結びつく～3歳前後

①そろそろ名前を指文字で全部教えてもいいかなあと思い、トーマスの仲間達の名前から教え始めた。さすがに数が多すぎて、覚えられないが、先日「カルピス」と指文字で教えた。そしたら、何回も自分で練習して、指文字で伝えられるようになった。(2歳11か月)

②最近は動詞も指文字ではじめました。「Fちゃん、パジャマきる？」と「きる」を指文字で伝えると「うん。きる(指文字→手話)」で返事をしてくれるのでわかっているようです。時々、ママにも「それ、きる(指文字)？」と聞いてきます。(2歳11か月・100dB)

32

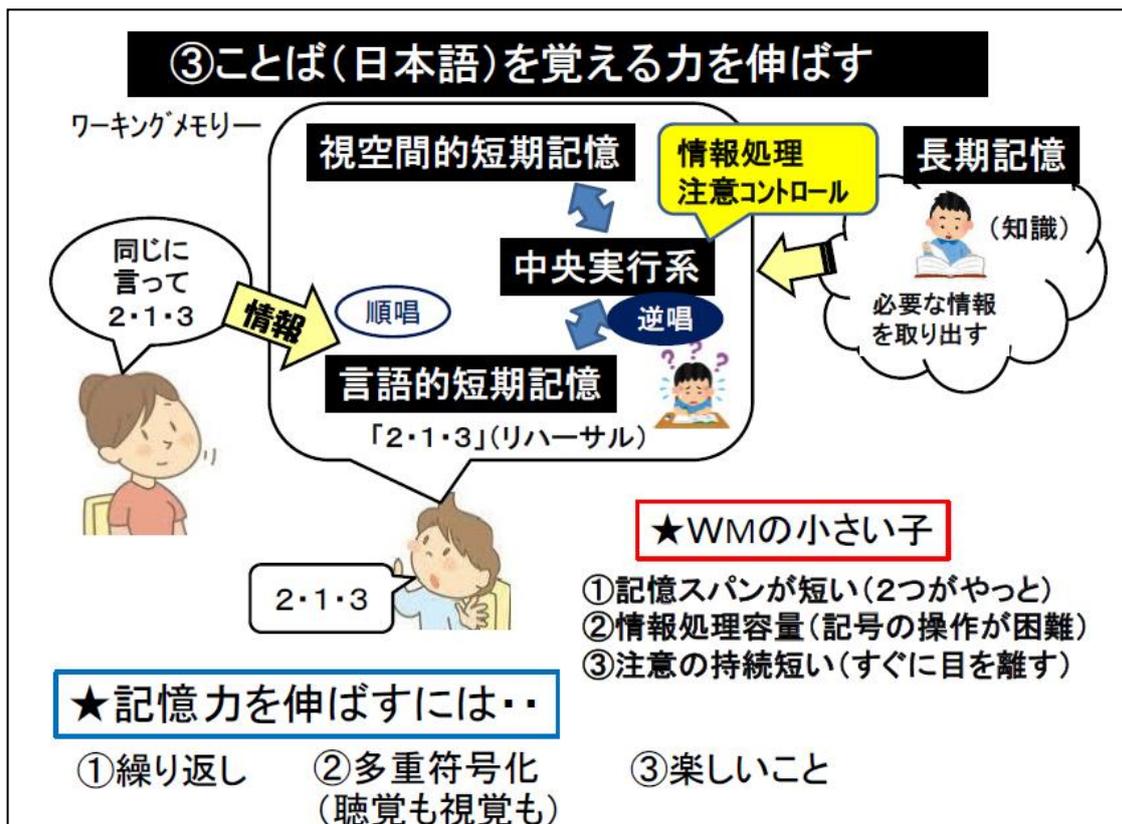
指文字(日本語)の「語彙爆発」は3歳以降？

【事例5】(100dB) 手話+指文字

M子が指文字表の「ろ」を指して「ケロのろ」、「め」を指して「ヤメピ(ケロとバムシリーズのキャラクター)のめ」、「こ」を指して「〇子、〇子のこ」と言っていた。“指文字ブーム到来！”(3歳0か月)

【事例6】(100dB) 手話(2歳代)⇒指文字(3歳半)

☆Sは、手話で2歳後半頃「これは何？」とよくきいていた。3歳半になって、Sのママが満面の笑みで「自分が作ったことは絵辞典の意味が分かった！」と興奮したように言っていた。今は、名前が知りたくて、ご飯も進まないぐらい野菜やいろいろなものを文字・指文字(日本語)できいている。(3歳6か月)



事例 日本語を伸ばすために工夫したこと(4歳～5歳頃)



- ①指文字で表現できる言葉を増やす。(友達や駅・キャラクターの名前などから)
- ②助詞を指文字で入れて話す(幼2後半～)正しい手話表現(位置関係)を使っていれば助詞の感覚が身につけやすいと感じた。回数も必要。
- ③手話でわかる言葉が増えたら、指文字・手話・指文字の順で示していく。形容詞や動詞など。
- ④テレビの字幕。見せるからには説明や通訳を心がける。状況説明。→知りたい気持ちを育てる
- ⑤図書館に定期的に通った。常に本がそばにある環境
- ⑥常に紙とペンがそばにあるようにした。

手話と日本語のあいだを行ったり来たりした

5. 「かず」に関わることばを使う

小1算数の学習事項・順序と出現語彙

① 10までの数(集合数)

② 何番目(順序数)

③ いくつといくつ(数の分割)

いくつ

④ 足し算(合併)

あわせて

みんな

ぜんぶ

⑤ 足し算(増加)

ふえる

くる

もらう

たす

⑥ 引き算(求残)

いく

へる

あげる

のこり

⑥ 引き算(求差)

ちがい

どちら

すくない

おい

そこに

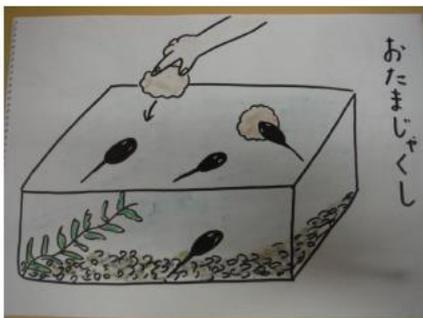
と

より

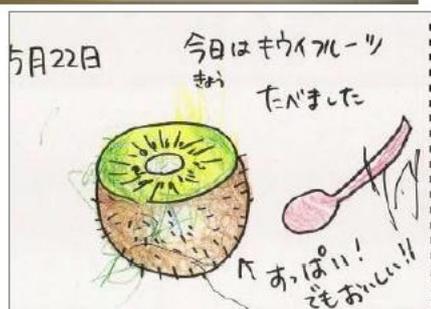
から

では

1. 文字の世界への導入 ～体験カードから絵日記へ



おたまじゃくし



5月22日

今日はキウイフルーツ
おたまじゃくし
をたべました

↑ あっはっ!
ぞもおいしい!!

- 親子で体験したことを**その場で絵に描く。**
- 描いた紙を切って、スケッチブック等に貼って保存する。
- 絵に**単語か2語文程度**の文字を添える。
- その場で描けない場合は、**後で写真や絵と文字で残す**

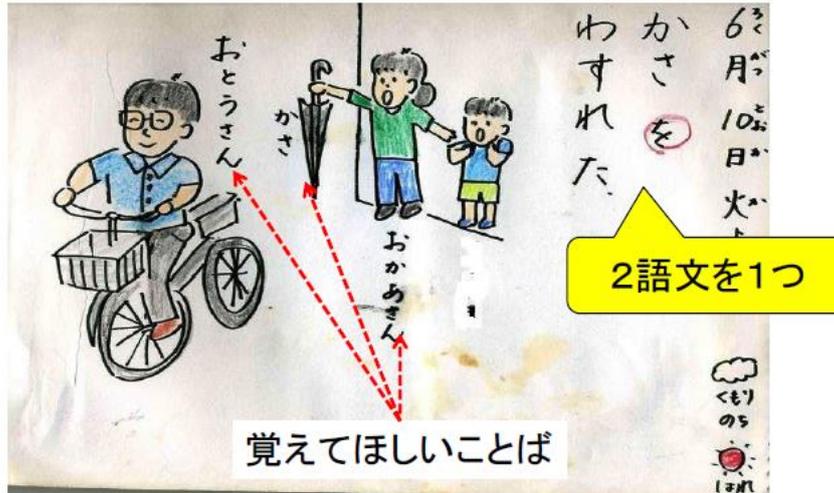


絵日記へ

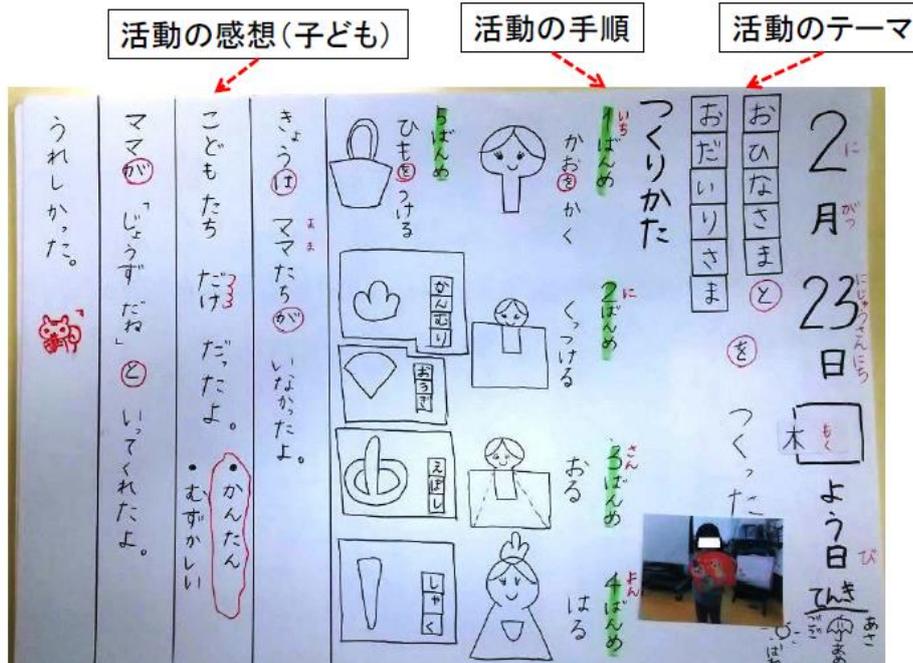
2. その日、子どもの印象に残ったことを書く

⇒書きながら話題を膨らませる。
そのためには子どもをよく観察している必要がある

年少児・1学期の日記



年少児・3学期の日記



4. 文法を視覚化して書く方法

年中・3学期の日記



活動手順にそって、2語文のシンプルな文を使用。

・品詞分類(文法の視覚化)

をして、

動詞「タ形」を使っている

動詞に用いる助詞の組み合わせを意識化

「～をつくる」「～をゆでる」「

～をむく」「～をいれる」

「時間がかかる」「絵が上手」

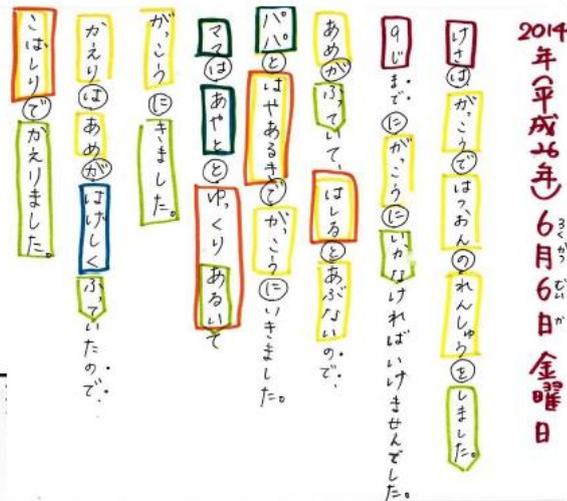
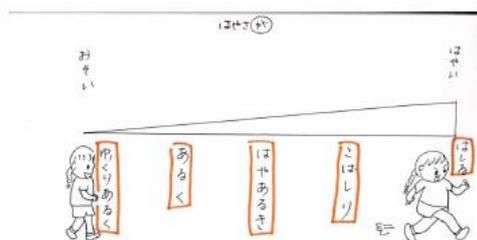
絵にたっぷり時間を使っている

年長児・1学期の日記

品詞分類(視覚化)

「歩く速度」の
言葉を図示

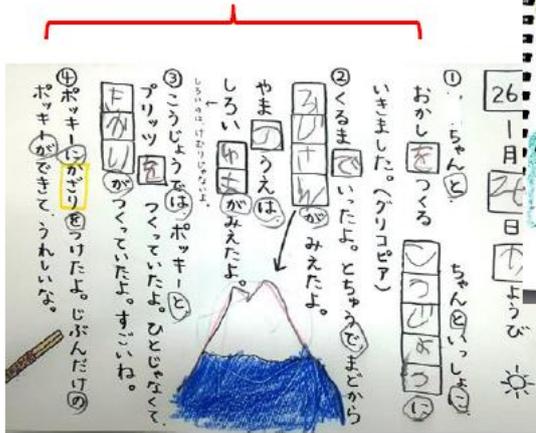
「ゆっくり歩く」「歩く」
「早歩き」「小走り」「走る」



5. 部分的に子どもに書かせる方法

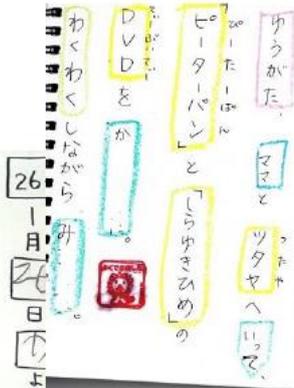
年少児・3学期

4段落構成

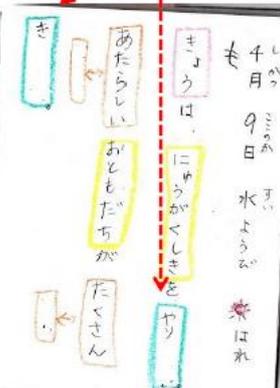


助詞を空欄に

年長児・1学期

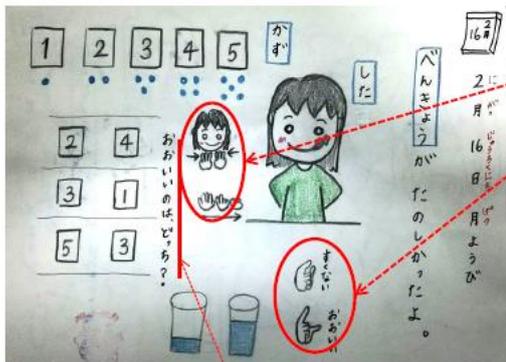


動詞を空欄に



6. 難しい語には手話の絵も入れる

年少3学期



手話の絵

比較のことばを使う
「どちらが〜」「〜のほうが」

年中3学期



オノマトペを使う②

うすむらさきいろの すてきなコートです。
 ゆたしは、そのコートをきくと、きもちが
 とても **ウキウキ**します。
 きのは、いえのながでもずしんと
 またま、よるこは、たべたり、
 ねたりしました。
 コートをきくと

年長4月

4コマ漫画付き



12月9日 火曜日
 きのう、ママ
 かつくれました。
 あたり

擬態語
 「ウキウキする」
 「くるくと回る」

4月20日 日曜日

あはあちゃんか
 たけとんぼと
 かけてくれました。
 きょうのあさ
 いえのまえで、
 たけとんぼを
 とほして
 みました。
 りょうご
 まわすと
 たけとんぼの
 はねが
 くるくと
 まわって
 とびます。

五感を使って書く

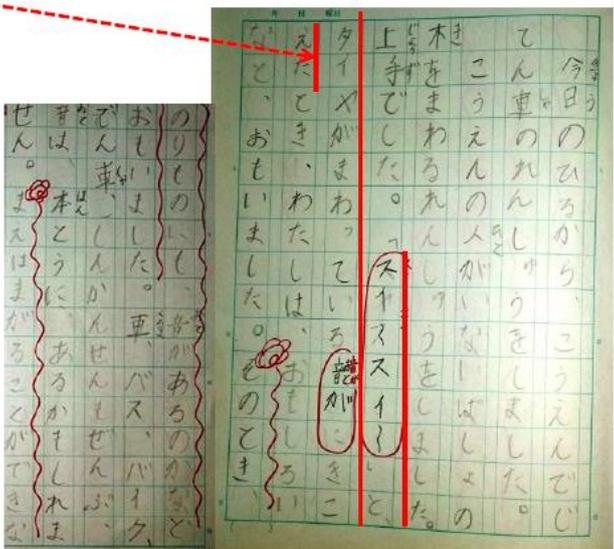








6月27日 木曜日 てんき
 みずだまり
 みずだまり
 ①
 ②
 ③
 ④
 ⑤
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳



因果関係がわかるように書く

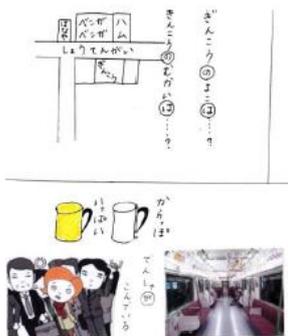
年中児(3学期)

年中児(1学期)



生活を教える

ATM(社会的な知識)

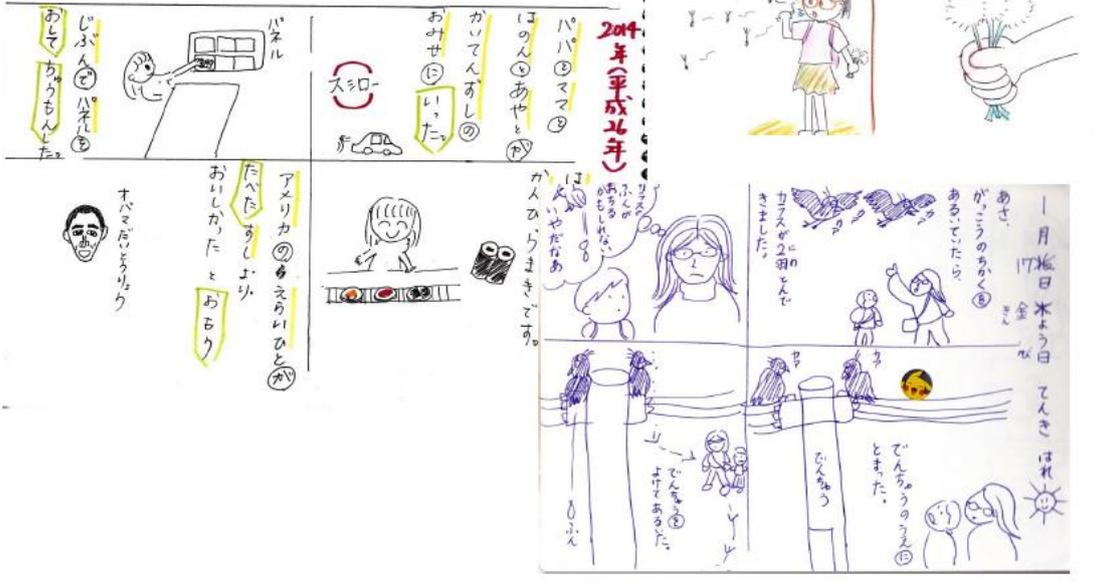


あしあとのとニコニコまているらしい。
 きうう(か)り(は)た(た)から。またなかつた。
 だれもいばつた。
 ほんりうのむかいにあるスーパーには。
 ひと(か)と(か)い(ま)した。
 ママと(か)ん(に)い(ま)した。
 ママ(か)ん(に)お(か)ね(を)お(う)れ(ま)した。
 ママ(か)ん(に)あ(し)あ(と)あ(り)ま(し)た。
 ママ(か)ん(に)あ(し)あ(と)あ(り)ま(し)た。
 ママ(か)ん(に)あ(し)あ(と)あ(り)ま(し)た。

2014年(平成26年) 6月9日 曜日

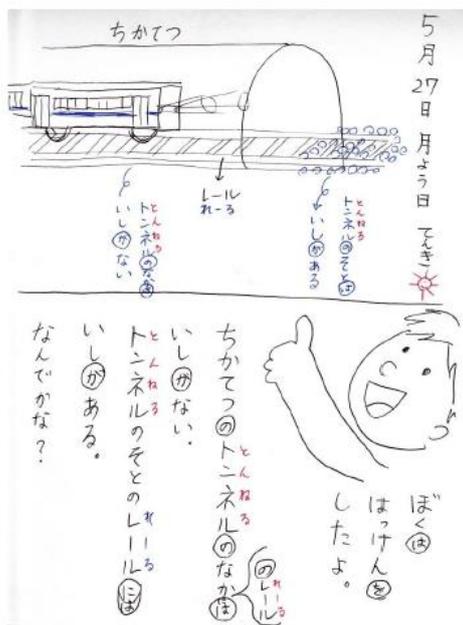
4コマ漫画で書く

子どもにト書きやセリフを
言わせるのも一方法



発見したことを書く

年長児(1学期)



コミュニケーションから手話、 そして読み書きへ

講師 武居 渡 先生

(金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授)

武居渡（たけい わたる）先生は、筑波大学大学院心身障害学研究科で手話について研究された後、1999年に金沢大学教育学部に講師として着任、現在は同大学・人間社会研究域学校教育系教授として、主に特別支援学校の教員養成にかかわっておられます。また、障がい学生支援室長もお務めです。

ろうの両親のもとに育った聴者（CODA）で、手話と日本語のバイリンガルです。専門は、聴覚障害教育、博士（心身障害学）。特に、子どもの手話の発達や手話能力評価法の開発などに取り組んでこられました。主な著書に『手話の心理学』（東峰書房）があります。

NHKのEテレで毎週日曜に放映されている「みんなの手話」の監修も行っておられるご多忙な日々ですが、大阪にお招きできることになりました。「こめっこ」活動に期待を寄せて、コミュニケーションとは何か、手話の発達とその役割、そして、手話をどのように日本語につなげていくのかについて、わかりやすくお話しいただきます。

○自己紹介

金沢大学の武居と申します。新聞・ニュース等でご存知のように金沢はものすごい雪でして、私は金沢に来て18年目になりますが、こんなに大雪だったことはありません。先週山口に出張だったのですが、金沢から新大阪に出ることができませんでした。サンダーバードが止まっていて何時間もかけて東京回りで行きました。今日は雪も風もあって電車が少し遅れていましたが、無事こちらに来ることができました。

今日はこめっこに参加されているお子さんやその保護者の方が中心ということなので、手話やコミュニケーションのことを中心にお話をしたいと思います。

簡単に自己紹介をします。1999年に金沢大学に赴任しました。その前は筑波に10年間いて教員として金沢に来ました。今はろう学校の先生を養成するという仕事をしています。研究としては子どもの手話の獲得とか子どもの手話力の評価、手話の力を使ってど

んなふうに日本語の力につなげていくかということテーマにしています。みんなの手話の監修をしているので言語学者ですかと聞かれますが、そうではありません。言語学については自分なりに勉強はしましたが専門家ではありません。

私は東京出身で、かなり高齢ですが両親が東京にいます。2人とも聞こえませんが、実家に帰ると基本的には手話でのやりとりになります。父は中途失聴でAろう学校、高等部までであった時代のAろう学校です。耳が聞こえなくなった後Aろう学校に転校して、そこで高等部までいて、その後紆余曲折ありましたがBろう学校、今はなくなりましたが、そこで長らく教員をして退職して今は家にいます。ですから私の手話は当時のAろう学校の手話だったので、今の手話と違います。小さい時は「学校」や「先生」、「日曜日」などの手話は今と違う手話を使っていました。母は生まれつき聞こえなくて、5人兄弟の2番目です。上3人が聞こえませんが、聞こえない3人は全員静岡のCろう学校を卒業しています。母はCろう学校にある理容科の1期生です。同級生、後輩が伊豆半島に自営で床屋さんをいっぱいやっています。3人聞こえなくて、それぞれ結婚しているので親も含めて聞こえない人が6人親戚にいることになります。親戚が集まるときは聞こえない人が6人いるので手話の花が咲くという状況です。

小さいときは祖父母が1階に住んでいてそこでは基本音声を使います。2階に行くと手話の世界で1階にいくと音声、となんとなくそんなチャンネルが自分の中であるのかなと思います。僕は2階であまり声を出した記憶がありません。そのおかげであまり苦労せず手話も日本語も学ぶことができました。手話もサークルや講習会で学ばず、小学校に入るところにはある程度手話で会話ができる程度になっていました。

○何のために教育を行うのか

私は教育のことをしていますが、特にろう教育では日本語力とか学力とかをどうやってつけていくのかとよく言われます。しかし本当に大切なことは、聞こえない・聞こえにくい子どもたちが聞こえない・聞こえにくい大人になって、聞こえない・聞こえにくいおじいちゃん・おばあちゃんになって自分の人生の幕を閉じることになるわけです。教育って何のためにするのかというと、自分が70、80歳になって自分の人生の幕を閉じるときに「自分の耳は聞こえなかったけど、聞こえない自分の人生も悪くなかったな」とそういう人生が送れるように教育って行われていくものだと思います。

○聞こえない子どもたちの成長に伴って考えていくべきこと

そのために何が必要か。聞こえない子どもの幸せを構成する要素は何なのかというと、コミュニケーションと日本語力と障害認識の3つだと思います。同じことを岡山の福島先生という耳鼻科のお医者さんの研究の中で、岡山は内山下小学校という日本で初めて難聴学級ができた県なのですが、その卒業生にいろんなアンケートをとって統計的処理をして、40、50歳代で幸せだと思っている人はどういう感じなのか、幸せじゃないと思っ

ている人はどういう感じなのかを統計的に分析したら同じ結果が出ているんです。つまり、聞こえない子どもたちが幸せになるための要素を3つ上げていて、1つは友だちの多さです。まさにコミュニケーションです。聞こえる友だち・聞こえない友だち関係なく友だちが多いと自分の人生を幸せに思っていて、友だちが少ないとその逆です。2つ目は学歴です。高い学力・学歴を持っている人は自分の人生は幸せだと思っているし、中学卒業してすぐ働いた人は自分の人生少ししんどかったと思っている。3つ目は現在の職場の状況です。職場が快適で楽しい、周りがわかってくれるというところで働いている人は幸せだと思います。つまり日本語力は確かに聞こえない子どもたちのQOLを上げるためには貢献しているが、だからと言って日本語力が高いからと言って即幸せだとは言えないということです。

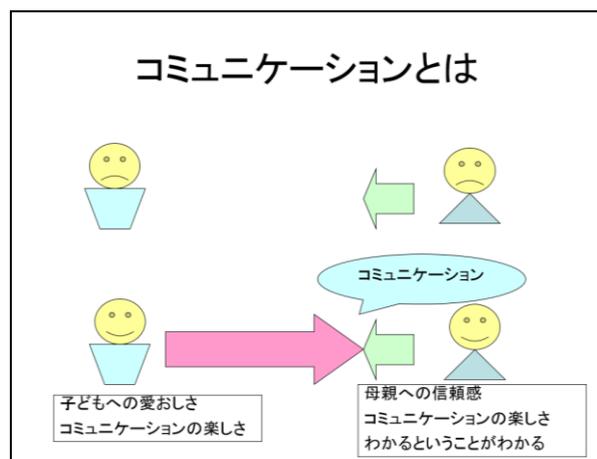
○コミュニケーションとは

今日は3つ、コミュニケーションの話、学力の話、障害認識の話をしていきたいと思えます。

まずコミュニケーションの話です。

私はろう学校の先生や保護者の方にこの図を使って、10年以上お話していますが今でも揺らぎません。ここがないことにはこの後の日本語の話をしてここにもどります。

向かって左側が大人、右が子どもとしてみてください。子どもから矢印が伸びています。この矢印が短すぎて大人まで届いていません。私たちはつい聞こえない・聞こえにくい子どもに指導や訓練して、この矢印を少しでも長くしようと考えがちなんです。この矢印が大人まで届いたらコミュニケーション力がついたと考えがちです。そのために発音の指導をしたり、言語訓練をすると考えがちです。しかし、コミュニケ



ーションってのはたしてそんなものでしょうか。子どもの矢印が短かったら、大人の矢印を伸ばしてやる。そうしたら矢印と矢印がぶつかる接点ができるわけです。それがコミュニケーションだと私は思っています。大人の矢印をのばすとはどういうことかということ、子どもの発信は未熟かもしれない。あーあーと言っているだけかもしれない。ただ泣くだけかもしれない。でもなんで泣いているのか、なんであーあーなのか、子どもはどこを見ているのか、何を見ているのか。そういうことを加味しながら子どもが言いたいことを大人が汲み取って返してあげる。それが大人の矢印を伸ばすということです。私の前に小さい子どもたちがいますが、この時期は矢印を伸ばすより、矢印の接点をたくさん経験させてほしいと思います。お母さん、先生が子どもの言いたいことを汲み取ってわかったよと返

してあげる経験をたくさん積んでほしいと思います。なぜならば自分が発信しても、周りの大人がそうじゃない、わからないという反応なら子どもは話したくない、伝えたくないという気持ちになります。でも、子どもの発信が未熟でもわかってくれるという経験を積みめば、大好きなおとうさん・お母さんにもっと伝えたい、もっと話したい、そしてお母さんのことをもっとわかりたいという気持ちになってきます。矢印と矢印がぶつかる経験をたくさんすることで子どもは大人に対する信頼感が生まれます。子どもを育てるとき、学校でも家でも大人を信頼できる子どもに育てたいと思います。大人を信頼できない子どもに育てたくはないと。そのためにはわかってあげる経験をできるだけたくさんする。そういうコミュニケーションをしていれば、当然コミュニケーションが楽しくなる。いつも修正されるばかりではつまらないけれど、自分の発信に対してわかってくれて返してくれるという経験をしていると楽しくなってくるので、もっと伝えたい、もっとわかってほしいという気持ちになってきます。そうすると自ずとこの最初は短い矢印が伸びてくることになります。最初はあーあーだけだったのが、指さしがついたり手話がついたりすることがでてくるようになる。そして、最も大切なのはわかるということがわかるということ。この時期にわかる経験をいっぱい積み上げることがこの後の学習にとっても大切です。なぜなら、わかるということがわかると、わからないということがわかるんです。わからないことがわかったら、わかるための手段をいくらでも講じることができるのです。具体的にろう学校の生徒たちの例をあげます。

僕が金沢に赴任した年に3歳だった子たちから手話が入るようになりました。ずっと手話で3～5歳の間育った子たちは1学年12人という大きな集団でした。聴力の重い子も軽い子も重複の子もいろんな子がいます。その子たちが5歳になった時、希望者は地域の保育園や幼稚園に交流にでます。それまでの子も5歳になったら交流にでていて、その子たちはそれなりに楽しく遊んで楽しく帰ってきていたので、先生たちもいつものように「いっといで」と送り出しました。交流日は金曜だったので週が明けて月曜に「先週の交流、どうだった？」という話し合いになるわけです。その時に子どもたちは「もう僕は交流に行きたくない」と口々に言いました。今までそんなことがなかったので、先生はびっくりして「なぜ？」と聞きました。すると子どもたちは「保育園の先生は手話を使ってくれないから先生の言っていることや周りの子が言っていることがさっぱりわからない。だからろう学校の先生と一緒に来てくれるのなら僕は交流に行くけど、そうでなければあまり行きたくない」というようなことを言う。これってすごいことで5歳という年齢で保育園に行って自分がわかってないということがちゃんとわかっているんです。それで「先生、一緒に来て」と言えるんです。もう少し大きくなったら、もう一回言ってとか、紙に書いてとか手話でお話ししてと言えるんです。だけど自分がわかっていないということがわからなければ、保育園に行ってよくわからないままに時間が流れて行って、なんとなくぼやーと楽しかったなで帰ってきちゃうわけです。そうではなく、わからないことがちゃんとわかることが僕はすごいなと思います。なぜわからないことがわかるということになった

かという、3歳4歳の時あるいは0、1、2歳の時にちゃんとわかる経験を積み上げていっているからだと思います。手話が入っているということで先生や親との間に互いにわかり合える関係ができています。だからわからない状況になった時にちゃんとわからないということがわかる。これは大切なこと。数学が得意な人が苦手な人に対して、数学楽しいよ、わからないことがあればいつでも教えると言っても、苦手な人にとってはわからないところがわからない。そういう意味では、この大切な時期にわかる経験を十分積み上げてほしいです。

それは家庭の中では日常的によくあることです。例えば、全員家族が聞こえない場合は手話がメインのコミュニケーションになるのであまりわからないという場面は少ないと思いますが、子ども以外は全員聞こえる場合、お姉ちゃんとお母さんと一緒にテレビの話をしている。何かで2人が笑った。その時聞こえない子が「何？」と言った。そんな時「後でね」と流してしまいがちです。そういう場面こそちゃんと説明してあげ、わかる経験をひとつひとつ積み上げていくことが、今後直面するわからない状況の時に「わからないということがわかる」ということが大切なポイントだと思います。お風呂の場面とか食事の場面とか朝の忙しい場面とか、ついついないがしろにしていってしまうような時に、ちょっと今話を思い出していただき「ここでちゃんと説明することが大切だな」ということを思い出して説明してあげてほしいと思います。その時に手話の力というのはものすごい力を発揮します。通じ合えますから。

○コミュニケーション能力???

だからコミュニケーションというのは、つい能力という言い方をしがちです。コミュニケーション力が高いとか低いとか。能力ではありません。この子のコミュニケーションの力が弱いというのは、私がこの子の言いたいことを汲み取る力が弱いと言っているのと同じです。この子のコミュニケーションの力を育てなければというのは、言い換えれば私のコミュニケーションの力を育てなければということと同じことです。コミュニケーションは個人に帰属する能力ではなく人と人之间にあるもの。それを考えるとこの子と通じ合いたいと考えた時、こちらの矢印を伸ばして汲み取って、汲み取るだけでなくちゃんとわかったよと返してあげる。その経験が人への信頼につながり、わかる経験に繋がり、その上に学力・言語力が乗っかってくる。

○コミュニケーションと言語

ことばがないとコミュニケーションができないかという、そうではないです。0歳の赤ちゃんでもいろんな発信をしています。泣いたり、じーっと見つめたり、指さしたり、声を出したり。そこからこの子は何を言いたいのか汲み取って、ちゃんと返してあげる。重症心身障害者の人たち、一般的には寝たきりと言われている人であっても、その人をよく知っている人にとっては寝たきりではないです。嬉しい時にはちょっと頬が緩むとか、

嫌なときはちょっと頬が緊張するとか。そういうものを通して自分の意思を伝えてきている。それを汲み取れるかどうかは周りの大人の側の問題だと。それは言葉の前にコミュニケーションがある。十分なコミュニケーションの上に手話も日本語も乗ってくると私は考えています。

○家庭内でのコミュニケーション

ですからコミュニケーションは教えるものではなく、二人で育てていくものということです。詰め込んだものはろくなことになりません。その最たる例が受験勉強のための英語です。今の英語教育はいいですが、私の若い頃は試験に出る英単語をひたすら覚えてというものだったので、単語は知っているが使えないということがあります。本当に使える英語は、それを使わなくてはいけないという自分の必要性があって、自ら必要に迫られてつかみとった単語は使えます。ただ与えられただけでは使えません。これは日本語も同じです。聞こえない子どもたちに単語を無理やり覚えさせても、単語テストで点は取れてもそれは生きた単語にはならない。本当に必要なのは言葉をつかみ取ることが必要です。自らつかみ取れるようにどんなふうに文脈や環境を作っていくのかが、学校の先生の大きな仕事になってきます。

ここまでが一つ目のお話でした。私が話したかったのはこの一つ目につきるところがあります。特に小さな子の場合は今のこの時期が大切です。しかも0歳から5歳までで出来なかったからもうだめだというものではありません。この部分がしっかりしていなければ次のことをしようとしても積みあがらず、結局ここに戻ってきます。わかる経験をちゃんと積み上げるということが非常に重要だと考えています。

○ろう教育の目指す方向性

次のお話に進みます。

今、多くのろう学校は手話を一時期よりかなり使っています。手話を禁止しているろう学校は全国でも数えるほどしかありません。幼稚部で使わなくても、小学校以上では当たり前に使われ共通のコミュニケーションになっているところが多いです。ですがろう学校の先生方は手話で話ができただけからそれでよかったと思っているわけではありません。手話の力をしっかりつけて、読み書きの力もしっかりつけるということがろう学校の先生方が狙うところです。

○ますます必要になってくる日本語の力

読む力、書く力はすごく大切になります。なぜなら科学技術の進歩により聞こえない人を取り巻く環境はすごく変わりました。私の父親母親の時代の聴覚障害者は情報の障害だと言われていました。例えば僕が小さいころ、父親が聞こえない友だちのところ遊びに行くとき、われわれだと電話で伝えればそれでいいのです。ところが聞こえない人が聞こ

えない人のところに連絡しようとする、こちら側で手話通訳に電話をしてもらっても相手側にその電話を取って手話に変えてくれる人がいなければメッセージは伝えられません。ではどうするか。母親は往復はがきを書いて送ります。1週間くらいで返事が来て、その返事を見てそれじゃ遊びに行くねという話で10日間くらいかかります。それが小学校4年の頃にFAXが我が家に入りました。FAXで出したら30分くらいで返事が返ってきます。これはすごく大きな変化でした。まして今はメールやLINEでリアルタイムでしかも相手を読んだかどうか既読マークでわかるわけです。もう聞こえない人たちは情報障害ではありません。テレビのドラマも私の小さいころは字幕もなく、それでも楽しめる8時だよ全員集合くらいは見ましたが、ドラマ、ニュースをほとんど見ませんでした。それが今では父親母親は80歳近くになりましたが、朝の連続ドラマを毎日見えています。インターネットでいろんなものも調べられます。電車が遅れてどうしたんだろうとすぐ調べてわかる。だからもう情報障害ではありません。

○メディア・リテラシー

ただし、このような文明の利器は基本的にはすべて日本語です。だから日本語の読む力・書く力があれば彼らは聞こえる人間と同じ情報を得て、同じように戦えます。ただし日本語が苦手となるとこのような文明の利器が使えないので、情報障害になってしまうところがあります。以前の状況とかなり違うということです。日本語の読み書きができれば多くの情報を手に入れることができるが、とくにインターネットなどはまちがった情報がいっぱい出ているので、自分でこの情報は信じてはいけないと自分で判断できる力をも身に着けないといけないということです。

私は幼児期に手話を通してわかる経験を積み上げると、その力が読み書きの力につながると思っています。手話の力やわかる経験が足りない時に日本語を教えようとしてもなかなか積みあがっていかない事例をたくさん見えていますので、手話でしっかり伝えあう経験を積みればそれは手話だけで終わらずその力は読み書きの力につながると思っています。

○リテラシーの2つの側面

少し具体的にお話をします。

ここからは保護者の方より学校の先生にお話しすべきことかもしれませんが、手話力がどんなふうに関係していくのかの見通しを持つために少しお話ししたいと思います。リテラシーには2つの側面を持っていると思っています。1つはボトムアップの側面、読解的側面。もう一つはトップダウンの側面。私たちが読み書きと言ってイメージするのがおそらくボトムアップの側面だと思います。

○読解的読みの側面

ボトムアップの考え方はどういう風に読み書きを考えるのかというと、知識や情報は読

み手の外側にある、つまり文章があればこの文章の中にさまざまな知識や情報があるということで、読むということを通じてテキストの中にある情報を自分の中に取り込むことが読むということだと捉える。その考え方でいくと基本的にはテキストは文字の羅列なので文字を知らないと読めません。まずは文字を覚えなさいといけなさい。日本語だとひらがなや漢字を覚え練習します。でも文字を読めるからといって意味が分かるわけではありません。単語をわからないと読めないで、次に単語を覚えます。単語カードを作ったりして覚えるかもしれないし、単語リストを作って覚えるかもしれない。でも、単語がわかったからといって文がわかるかという単語と単語の関係、日本語で言えば助詞文法です。そこがわからないと文の意味はとれません。助詞のドリルをしたりということになります。指導というのは、覚える・練習する・繰り返す・ドリルとか、どちらかという暗記やドリルの指導が読解的側面で考えると多くなります。この考え方でいくと日本語が苦手好きでない子ほどたくさんドリルをしないではいけません。しかし、そもそもたくさんドリルに耐えられる子は日本語を嫌いにならない、日本語力が上がるはずで、そうすると完全に自己矛盾に陥ってくるわけです。やればやるほど子どもは日本語が嫌いになるし、親子関係も悪くなっていく。そこにこれから話をするトップダウンの側面が入ってくる。そこに手話が入ってくるという話です。

○批判的読みの側面

批判的読みというのは、真実はテキストの中にはないと捉える。では「読む」というのはどういう風に考えるかという、ここに書いてあるテキストを私はどういう風に読むか。矢印が自分からテキストになります。テキストの内容を理解するために自分の経験や想像力、友だちとのディスカッションなどを通してこのテキストをどう読むのかということです。私たちにも経験があると思いますが、同じ文章を読んでも読む側の立場が違えば全然違う印象を受けることがあります。私がそれを痛感した本は漫画化されて注目されている本で「君たちはどう生きるか」という岩波文庫から出ている本です。中学生の時に読んで触発というか、感銘を受けました。内容はコペル君という男の子がいて、その子が学校などでいろんな哲学的な問題に直面して悩むわけです。悩んだことをおじさんに言います。そうするとおじさんが哲学的観点からコペル君に手紙を書いてくれます。その手紙のやり取りが本になっているというストーリーです。中学生で読んだときには自分自身は完全にコペル君にアンデンティファイするわけです。だからこういうおじさんがいたらいいなと思うし、同じようにコペル君は悩んでいるので、あっこういうことなんだとコペル君にアイデンティファイします。ところが今は子どもが小学校4年生ですが、今その本を読んだらコペル君ではなくおじさんの方にアイデンティファイします。こんな風に子どもに説明したらいいのかと。同じ本ですが、読み方が変わってきます。テキストはそういうものなのだと捉えるのが批判的読みの考え方です。

○手話で内容を深めて日本語につなげる段階（小1～小3）

この考え方をを使ってどうやって日本語の力を育てるの？と言った時、これも10数年前ですが、ろうあ連盟手話研究所にろう教育研究部というのがあり、そこで小学校1年生から3年生までの光村図書の教科書の手話翻訳ビデオを作りました。小学校1年生なら初めて出会う長めの物語文なら「くじらぐも」という教材が1年生の9月から10月くらいにあります。2年生なら「スイミー」があります。3年生になると戦争教材で「ちいちゃんのかげおくり」という難しい教材があります。これまで日本語があまり得意でない子どもたちがそのような物語文で授業をしようとするすると単語ごとでつまずいて、ひとつひとつ単語の意味がわからない。そうするとずっと読めない。授業をしようとするすると単語の意味学習のような授業になってしまいます。そんな授業は当然つまらないので、もう国語は結構です、嫌いになります。国語が嫌いになると本を読まなくなる。本を読まなくなるとますます日本語力がつかなくなるという負のスパイラルに陥ってしまう。しかし手話がちゃんとできれば、手話研究所で教科書の手話ビデオを作ったので、それを使うと教科書を開く前にまずは手話ビデオで物語の内容を全部理解できます。学校、または先生によっては家で何回か見て覚えてきてねという宿題が出るかもしれません。そうやって手話ビデオを通して全体の中身がわかり、教科書を開きます。教科書の中には確かにわからない単語はあるかもしれませんが、ここに書かれていることは手話を通して全部わかった話です。だからわかっている内容について日本語で書かれているので読めるし、わからない、どういう意味だろうという時、もう一度手話に帰っていく。そうすると、これはこういう意味なんだ、こういう風に日本語は使うのかと、手話と日本語を行ったり来たりして、ここに書いてあるチェーニングという作業です。そうやって日本語の力をつけていく。

もう一つ具体例をあげます。手話のビデオを使った作文の授業で、時々ろう学校の先生にはお話している内容です。私の研究室の卒業生で今ろう学校の先生をしている人ですが、その卒業生の卒業論文です。手話の力を使って作文の授業をできないかというのがテーマでした。対象の子どもは日本語が苦手嫌いになっている。その代り手話ではいろんな話ができます。その子にどのような作文の授業をするのか。対象の子は小学校4年生でしたが、200文字以上の作文は書けなかったし、日記も「朝起きました。納豆ご飯を食べました」という決まった文章が毎日書かれているというお子さんでした。当時「あらしのよるに」という映画が出たころでしたので、まず手話で読み聞かせをしました。内容はご存知のようにオオカミとヤギが夜に出会って、友だちの約束をして別れるわけです。ところが別れるときにヤギは相手がオオカミだと、オオカミは相手がヤギだとわかってしまうのです。オオカミはヤギを食べたい。でも友だちの約束をしちゃった。ヤギもオオカミに食べられたくない。でも友だちの約束をしちゃった。そのあと話は展開していきますが、ここまで手話で読み聞かせをしてこの後続きはどうなると思う？と子どもと先生で続きのお話を手話で作ります。最初は会話で作ります。手話だとばっちり考えられるので、ある程度続きの話ができたなら、「今のお話を今度は一人で、手話で続きを話してみよう」と言って手

話で一人で話をしてもらいそれをビデオに撮ります。それで1日目の授業は終わります。2日目はそのビデオを再生しながら、ここに書かれてある内容を今度は日本語で書いていきます。そうすると200文字以上書いたことのない子でしたが、45分の授業で2枚半、1000字書くのです。確かに「てにをは」の間違ひも多少ありましたが、それは担任の先生との話の中で、自分で書くことを大切にしたいから聞いてきたら答えるけれどあまり細かい直しはこちらからはしないでおこうと話をしていました。なぜ200字しかかけない子が1000字かけたか。日本語が得意じゃない子というのは、作文で何を書くかという負荷と、どういう日本語を使って書くかという負荷が2つ肩に乗っかっているのです。この実践では、何を書くかというところは手話ですすでに作ってあるので、あとはどういう日本語を使って書くのかというところだけに自分の力を費やしてかけるので、書くことが嫌でなくなる。手話の力を使って先に意味を与える、意味を作るということが可能になります。

手話ビデオの話に戻りますが、ろう教育研究部でビデオを作っろう学校に送った時に、先生方から手話ビデオをうまく使えないという声がかかってきました。何が難しかったかということ、手話ビデオを理解できるだけの手話力がついてないと、そこから日本語の力にはつながらないのです。だから手話の力というのが必要なのです。やりとりだけの手話の力ではなく、それだと自分の聞きたい話だけお母さんはしてくれるし、自分が言えなかったところもお母さんや先生が補ってくれますが、手話ビデオというのは子どもが聞きたいか聞きたくないかに関わらず一方的にしゃべります。そういうものが理解できるところまで手話の力を持って行って小学部に入るとそれは日本語の力につながる。

○日本語で日本語を学ぶ段階

ただし、最終的にはどれだけ日本語を読んで、日本語を書くかです。私たちの英語と同じです。どんなに英語を教えるのが上手な先生に英語を習っても最終的にはどれだけたくさんの英語を読んで、どれだけたくさんの英語を書くかにつきます。聞こえない子も同じで最終的にはたくさん本を読んで、たくさんものを書くところにつきます。ところがそれができるだけの、あるいはそうしたくなるようなところまで持っていくというのが、ろう教育の仕事なのかなと思います。ですから子どもを日本語嫌いにしてはいけないというのが私のポリシーです。子どもが日本語を嫌いになってしまったら、そこでそれ以上の伸びはなくなるので日本語を絶対に嫌いにさせない。そのために手話の力はものすごく大きいと思っています。これが2つ目のお話です。

○聞こえないことをどう捉えるか

3つ目は障害認識の話です。

私は筑波大学で10年間いました。私がいた時でも筑波大学に10人くらいの聴覚障害の学生がいました。隣の筑波技術短大には1学年50人の聴覚障害の学生がいました。当

時は筑波に入る聴覚障害の学生のほとんどが一般の高校から入ってきていました。ろう学校からきたというのは筑波大学附属ろう学校を卒業した人たちだけでした。今は違います。だいせんから来ましたとか、京都ろうから来ましたという人がいます。私の先輩、同級生、特に後輩はほとんど普通高校から来ましたと言って、それだけでなくろう学校の経験がまったくありませんという人たちがほとんどでした。その人たちはおそらく地元に戻ったら誰もがうらやむような人たちだと思います。しかし、実際に大学に入ってどういう状況だったか。

それはしんどいです。具体的にいうと、ある人は聴者にもろう者にもなれなくて苦しむことになります。これはどういうことかという、大学に入学して最初は情報保障もないので教室の一番前で自分で授業を受けます。ところが1か月くらいするとこのままでは話が分からず単位を落とすので、手話通訳をしてほしいと言い出しました。でも手話できないわけです。そうしたら今から覚えるからと言って先輩や地域の手話講習会に通って本当に手話ができるようになりました。それで手話を大体読み取れるぐらいの手話力がつく。授業もある程度わかるようになります。ところがその人の苦しみはそこから始まるのです。

今までは聞こえる友だちと一緒にいてわからないけど周りが笑うと一緒に笑い、「そうだよね」と言われるとよくわからないけど「うん」と言っていた。それでなんとか周りの友達と一緒にやっていた。ところが手話というのは自分が表現したらリアルタイムで相手にわかるし、相手が出ていることがリアルタイムで理解できるわけです。そういう世界を知ってしまったわけです。そうすると今までのようにみんなが笑っている時に自分も一緒に笑うということができなくなってしまう。「ねえ」と言われてよくわからないのに「うん」ということも言えなくなってしまう。そうするともう聞こえる人と一緒にいたくない。手話の世界を知ってしまったので、リアルタイムで話をするということが面白い。しかしろうの人が集まると本当に手話の花が咲くわけです。そのろうの人の手話が読み取れるほど、あるいは自分からそこに入って自分の話をするほど手話ができないので、その世界にも入れない。だから聞こえる人でもないし、聞こえない人でもないというところでものすごく苦しみます。不安定なというのはこういう意味です。最終的には落ち着いていくのですが、そういう人たちがいました。

もう一人、大学に入って初めて手話に出会った人で、それまではずっと普通小・中・高校で手話の「手」の字も知らなかった。大学に入って手話を覚えて、彼は聞こえる人とも今まで同じように上手に付き合い、聞こえない人とも手話を覚えて上手に付き合い、とても自然な形で聞こえる社会とも聞こえない社会ともつながっているように見えました。ところが3年生の時に初めて話してくれたことなのですが、「自分は小学生の時に自分は大人になれないと思っていた」なぜかと聞くと「ずっと小学校だったので、耳の聞こえないのは世の中で自分だけだと思っていた。聞こえない大人を見たことがないので、自分は大人になれない」と思っていた。だから「将来何になりたいの？」と聞かれることが嫌でたまらなかった。絶対なれないのに、なりたいものを聞かれることほどしんどいことはない

彼は言っていた。そしてこの話は今まで誰にも話したことはなかったと言いました。その話を聞いたとき、聞いている側も苦しかったです。彼は周りから見たら上手に2つの世界とつながっていたし、本人も2つの世界を大切に、いい形で手話を覚えたなと思っていましたが、それでもそのようなしんどさを持っている。

他にもろうの人で一切声を出すことを拒否した。これもろう学校の高等部の先生だったかと思うのですが、獣みたいな声と言われたのです。でも先生にしてみたら、そんなこと言うわけがないので、何か大きな声を出したときに「ほらそんな大きな獣みたいな声出して。なんだ」というくらいの軽い意味で言ったと思いますが、受け取る側は「自分の声は獣みたいなんだ」という風に受け止めて、そこから自分は一切声を出しませんと、声を出すことを拒否した人がいます。

それから次の例は、在学中、正月も一人で過ごす。今は違いますが、当時はろう教育の中で手話はまだ全然入っていない口話教育の時代だったので、しかもお母さんにも家庭の中で言葉を教える先生役を求めている時代でした。今も一部の医療系ではお母さんにそういうことを求めるところもあるのではと思いますし、この中にも言われている方がいらっしゃるかもしれません。その子が大きくなってどうなったか。彼は正月も一人で過ごしています。筑波大学は全国から集まるのですが、正月はそれぞれの故郷に帰るので誰もいなくなります。ゴーストタウンになります。そんなゴーストタウンの中で一人正月を過ごすのです。なぜ帰らないのか。

家に帰っても、もう20、21歳なのに言語指導されるのです。自分が何かしゃべっても、そのしゃべった内容ではなくて、「き」の音がちょっと側音化している。もう一回〇〇先生のところに行っておいで」そういうような発音が悪くなったかもしれない。そこをいろいろ言われることが嫌で、彼は正月帰らなかったのです。

国立の大学ですので、それなりの学力、成績はあります。でも、それだけじゃなかなか難しいということがこれらからわかると思います。一方で勉強や日本語は得意じゃないが、地域の3交代制の工場で働いてそこでお金を稼いで、土日はろうの人たちと卓球の練習をして、デフリンピックに出ましたとか、応援に行きましたとか、卓球に生活と命を懸けているという人もいれば、手話を聞こえる人に教えることが楽しくて、そういうところで手話を教えることを生きがいに行っている人などいろいろな人たちがいます。だから確かに学力・言語力は必要ですが、言語力や学力のためにすべてを犠牲にしてもいいかという話になると、やはりそれだけじゃないということです。

聞こえない人たちが聞こえる人たちの中で生きていくというのは、やはり大変なことです。例えば、筑波技大の卒業生ですが、女の子でしたが聞こえる友だちも聞こえない友だちもいて、とても明るくて、リーダー的な感じの印象のいい子がいました。彼女はどこに行っても大丈夫という感じの子でした。そして結構一流の企業に入りました。2年ぐらいして会って話を聞いたのですが、同じ部の中で「明日の朝10時から会議をするので会議室に来てください」という話になったわけです。「明日10時に会議なのね、わかった」と

思って次の日の朝礼の時「今日10時から別の会議が入ったので、昨日の会議は9時から変更します」と上司が言ったのですが、彼女は聞こえないからわからなかったわけです。それで10時に行ったら全然違う会議がそこで行われていて、おかしいなと思って机に戻ると上司が来て「さっきの会議、なぜ出なかったのか？」と言われたので「10時からとっていたので」と言うと「9時からに変更だと朝の朝礼で言っただろう」と。その後「わからなかったら、俺に聞いてくれればいくらでも教えるから、なんで俺に聞かないのか？」と怒られたと言うんです。でも変更された事実さえ知らないのにどうやって聞けというのか、と内心想った。それはそうですよね。上司もそれほど怒っていたわけではないし、日ごろよくしてくれる上司なので、ここでケンカ売ってもしようがないなと思って「わかりました、次から聞きます」と言ってその場は終えたと言っていました。できごととしてはそれだけなんです。別に上司との関係が悪くなったわけでもないし、上司も怒ったわけではない、小さな小さなできごとでした。でも、聞こえない人たちが聞こえる社会で生きる中で、そういうことが日常的にたくさんあるわけです。やはり、背伸びをしながら聞こえる人たちと付き合いがなくてはいけない状態があるわけです。では、どこで背伸びをしている状態からかかとをつけて話ができる場になるかということ、同じ手話を共有する聞こえない人たち、まさにここだと思うのですが、この場で思う存分手話で話をしたり、ろう協のイベントで何か仕事をしたり、聞こえない人たち同士でサッカーや野球をやって汗を流して、終わったら飲みに行くとか、そういうところでまた聞こえない仲間たちからエネルギーをもらって、聞こえる社会でがんばっていくわけです。その意味では聞こえない子どもたち、聞こえない人たちの集団は、聞こえない人たちが聞こえる人たちの中で生きていくために本当に必要だと僕は思います。だから、学力はもちろん大切だが、それよりも大切なものがあると書いたのはそういうことです。

聞こえないことをどう捉えるか。一番最初に『「1- α 」ではなくて、「1」の自分に』とサブタイトルを付けましたが、その意味は、聞こえない人は、聞こえる人から聞こえを取り除いた人ではないということです。聞こえる人から聞こえを取り除いた人と自分をとらえていたらそれは「1- α 」ですよね。そうであればできるだけ α の部分を小さくしようと、聞こえる人に近づこう、追いつこうと考えてしまう。そうではない。聞こえない手話を使う自分が「1」なんだと思ってほしい。ろう学校では中学部、高等部あたりで自分自身をしっかり見つめ、障害認識や自己理解ということを自立活動でかなりやっています。そのことについて昔からろう教育で言われてきましたが、用語が変わってきています。最初は「障害克服」という言葉が使われていました。「克服」という言葉には違和感がありますよね。障害ってそもそも克服するものなの、と思うわけです。「克服」という言葉には聞こえないより聞こえる方がいいというようなことが埋め込まれている感じがして、私はあまり好きではありません。その次にでてきたのが「障害受容」という言葉です。これはこれで違和感がありました。中途失聴の人が聞こえなくなったことを受容するのはわかります。でも生まれつき聞こえない子は受容もなにも聞こえない自分しか体験していないわけ

ですから、「受容」というのもちょっと合わないと思いましたし、しかも「受容」というのは甘んじて受け入れるという感じがして主体性がみられない。聞こえるようにはならないのだから聞こえないのは仕方ない、みたいな感じがしてこれも違うだろうと思いました。最近「障害認識」という言葉を使いますし「自己認識」という言葉も使います。僕はこれが一番しっくりくると思うのは、「克服」「受容」というのは、克服してない状態から克服した状態とか、受容していない状態から受容した状態と言う感じがしますが、「障害認識」というのは認識していない状態から認識した状態になることを求めているわけではないのです。聞こえない子たちは聞こえないということをそれぞれの発達年齢ごとにそれなりに認識しているわけです。それが人生のいろんなライフイベントごとに右に揺れたり、左に揺れたり、時には自信を失い、時には自信をつけながら自分自身をしっかり見つめる、これが障害認識なんだろうと思います。だから聞こえない自分に誇りを持って生きていくという人がいたとしても、大きくなって結婚して自分の子どもが生まれた時に、新生児聴覚スクリーニングで再検査・リファアになった。聞こえない子が生まれても自分は大丈夫だと思っていたのに、リファアになったとたんに動揺してしまう自分がある。自分の聞こえないということをちゃんと受け止めていたはずなのに、また自分が揺らぐ、という風にあるようなライフイベントごとに右に揺れたり、左に揺れたりしながらそれでも自分の聞こえないということと、聞こえない自分全体としっかり向き合っていく。これが障害認識の考え方です。

○ろう児のアイデンティティに影響を与える要因

聞こえない子どもたちのアイデンティティまたは自信に影響を与える要素を4つあげています。1つは同年齢集団です。生まれてから自分以外の聞こえない人と会ったことがないという環境にいたら、苦しいわけです。同じ聞こえない仲間がいるということが、自分を肯定的にあるいは自分をしっかり見つめるのに大きな要因になります。

2つめはろうの大人と出会うこと。それもまさにこの場です。ろうの大人の人たちと出会って、そこに自分の将来像を重ねる。こんな素敵な大人になれたらいいな、こんなお兄さん・お姉さんになれたらいいな、ということで自分の将来像を描けるし、自信にもつながっていく。

3つめは手話です。このあたりはきっと河崎先生からもいろんなお話を聞くとおもいますが、中等度難聴の方や聴覚活用ができていても手話と出会うことでとても変わります。少なくとも僕が大学の時出会ってきた人たちは、手話に出会う前までは不安定であったり、不安そうであったり、聞こえる人の顔色をうかがって生きている感じがしたのが、手話に出会って、手話で生きている聞こえない人たちと出会うことで、手話を使う自分に出会う。

4つ目。これがこの中で一番言いたかったことですが、聞こえない子どもたちが、自分が聞こえないということをちゃんと受け止める。卑下するわけでもなく、マイナスに見るわけでもなく、ちゃんと聞こえない自分を「1」の自分としてとらえるために何が影響す

るかと言うと、親や先生がそもそも聞こえない・聞こえにくいということをどうとらえているかということがとても大きい。これはコーダの研究というか、コーダの人たちとの出会いでとても感じたことです。コーダと言うのは、Children of Deaf Adults と言って親が聞こえなくて子どもが聞こえる、私のような立場です。その人たちは手話もかなりできるし、聞こえる人ともつながる。家では手話だけど、一歩出たら日本語になる。そのように2つの世界にかかわる人たちをコーダと言います。コーダの会と言うのが何年も前にできましたが、できた頃に少し関わったことがあり、びっくりしました。私は自分の親が聞こえないということが嫌だとか、恥ずかしいとか一度も思ったことがありません。親は旅行に行ってもどこでも手話を使っていました。バスは当時は音声だけでしたので、自分で運転手さんに自分たちの降りるバス停を伝え、聞こえないのでそのバス停になったら教えてくださいと自分で伝えていました。だから、通訳を僕に頼むことはほとんどありませんでした。だから親が嫌だと思ふことはなかった。コーダと言うのはみんなそんな風に思っていると思っていた。でもコーダの会に出会った時に、そうではない人がいっぱいいるということにまずショックを受けました。話を聞くとそうだなと思いました。ある人は買い物に親と行った。家で話すのと同じように母親に手話で話をすると、母親からその手を止められた。「あなたまで私と同じように聞こえないと思われるから外では手話をしてはダメよ」と言われたそうです。手話って恥ずかしいことなんだ、聞こえないっていうことは恥ずかしいことなんだ、ということは自分の親って恥ずかしい存在なんだ、と思う。そうすると親子関係ぼろぼろになり、家を飛び出して、今では遠回りをしていい関係にはなっていますが。でも、彼を責められるかと言うと、親自身が聞こえないということをそのように捉えていたら、それがそのまま子どもにいきます。

もう少し年配のコーダの例ですが、通訳をすべて自分の子どもに頼む。新聞代はいくら？というようなレベルではない。病院に行って手術をするべきかしないべきか、治療法もこんなものがあるってどっちの方法を選ぶか、というような通訳を6歳とか7歳の子どもに託すわけです。できるわけがない。プロの通訳の人でもすごく気を使うような通訳なのに、6歳7歳の子ができるわけがない。やはり、できません。彼女はできないことを全部自分の責任で背負い込みます。私がかまなかったから、私がかまなかったからと。そうなるとうどうなるか。親は子どもにどんどん頼るようになります。子どもはこの親は私がいないと生きていけないんだと思うので、その期待に応えることが自分の生きがいなんだと思います。完全にお互い寄りかかっている状態。共依存関係になるわけです。この不安定な状態で寄りかかっているのだからちょっとしたことでバサッと崩れます。案の定高校を卒業したら二人とも倒れて精神科のお世話になるということに。

何が言いたいかと言うと、聞こえない子どもたちが聞こえないということをどうとらえるかということは、子どもたちだけでなくその周りにいる親や先生が聞こえないということをどうとらえるかという問題に他ならないということです。それは4歳、5歳になったら多分お母さんにこんなことを聞いてきます。「なんで私の耳にだけ補聴器がついてる

の?」、あるいは「大人になったら、この補聴器とってもいいの?とれるの?」とか「おかあさんの耳にはなんで補聴器がついていないの?」と聞いてくる時が多分近い将来きます。もう聞いてきたという方もいらっしゃるかもしれません。その時にどんなふうに答えますか?まさにそういうことです。聞こえないということがどういうことか、それを努力して乗り越えなくてはいけないと思っていれば、それはそのまま子どもにいきます。ですから、そこをどのように答えるか考えてほしいなと思います。

ちなみに私だったらどう答えるかなと考えた時、これはぜんぜん答えではありませんが、自分だったら子どもにこのように聞くかなと思います。「じゃあ、補聴器をしている人って他に誰がいる?」と。そしたら「〇〇君と〇〇ちゃんと、〇〇君のお母さんと」と答えるかもしれない。「じゃ、補聴器をしていない人って誰がいる?」「お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、〇〇先生」と言うかもしれない。「じゃ、あなたはどっちの仲間?」「している人たちの仲間」、「じゃ、おかあさんはどっちの仲間?」「してない人の仲間」。「この世の中には補聴器をしている人たちの仲間と聞こえる人たちの仲間がいるんだね」と僕だったら話をするかな、と今の僕の答えになります。これはそれぞれの方が考えて答えられたらいいと思います。

○聞こえない人がなれない職業はない!

今、聞こえない人たちでなれない職業はありません。このスライドの職業の人は実際にいます。お勉強がすごく得意だったらお医者さんとか研究者とか大学の先生とかいます。ろう学校でもろうの先生がいっぱいいます。弁護士さんもいます。銀行員、会社員もたくさんいます。細かい芸術的な才能のある人は芸術家。石川県では九谷焼が有名ですが、九谷焼ですごく有名なろうの方がいます。その人に良くしてもらってますが、結婚祝いに湯呑を2ついただいて、本当はしてはいけないのですが、買ったらいくらぐらいするか調べたら2つで6万円。その方に「もったいなくて使えません」と言ったら、「作り手としては使ってもらってなんぼなんだ。だから筆筒の中にしまわれたら、こっちはなんも嬉しくない。使って割れたらまたあげるから、とにかく使ってくれ」と言われ、「では使います」と言って使ってもう10年以上になります。他にも画家さんとかたくさんいます。それから手話を教える大学とかカルチャーセンターなどで手話を教えることを生活の生業にしている人もいます。俳優さん、女優さんもいます。なれない仕事は基本的にはないと思っています。聞こえないことが自分の夢を邪魔するとか、さえぎるということは今の時代は基本的にはないと思っています。でも誰でもなれるというわけではありません。聞こえる人も同じで、誰でもお医者さんになれるかというところではないのと同じように、それなりに努力は必要です。

○障害のある人の権利に関する条約

障害のある人の権利に関する条約が2006年に国連で採択されました。詳しくは話し

ませんが、ここでのキーワードが合理的配慮という言葉です。

皆さんも合理的配慮という言葉聞いたことがあるかもしれませんが、和訳がよくなくて誤解をしてしまう。配慮といわれると心優しい人が聞こえない人のために慮って何かをしてあげるみたいな印象があるのではないかと思います。しかし合理的配慮というのはまったくそのような意味ではありません。最後にその話をします。

○合理的配慮のポイント

合理的配慮とは要するに障害ゆえに障害のない人と同じスタートラインに立てないのと同じスタートラインに立てるようにするというのが合理的配慮です。例えば視覚障害の人がセンター試験を受けるときに墨字の問題用紙と解答用紙を渡されても当然読めないし書けないので、点が取れず0点です。でも0点というのは明らかに他の人と同じスタートラインに立っていない。それは合理的配慮の不提供で差別になります。ではどうするかというと、点字の問題用紙と点字で解答できる用紙を用意します。しかも点字は墨字と違いなめ読みができず、一つ一つ読まないといけないので時間がかかります。そのため1.6倍の試験時間を延長します。そのようにして試験を受けてもらいます。これが同じスタートラインに立つという意味です。目が見えないと大変なので、英語と数学は最初から20点あげますというのは、合理的配慮ではありません。あきらかにこれはスタートラインを前にしているので合理的配慮ではありません。合理的配慮とは同じスタートラインに立つことを保障するというものです。

○合理的配慮の厳しさ

そういう意味ではいい時代になったともいえますが、僕はこの話を聞いたときに聞こえない人たちにとっては厳しい時代になったというのが率直な印象です。なぜなら合理的配慮の義務が発生するのは、本人が私はいこうい風にしてほしいと自分で合理的配慮の申請があった時であり、社会はその人に対して提供の義務が発生します。でも私は何もしなくて大丈夫です、他の人と同じで大丈夫ですという人は、社会は合理的配慮の提供の義務はありません。つまり本人が支援を要求して社会は提供の義務が発生し、しかも提供するに際し必ず求めているものすべてが提供されるわけではありません。合理的配慮というのは英語で reasonable accommodation。「reasonable」というのは「理にかなった」という意味で「accommodation」はこの場合は「調整」という意味です。つまり大学で「私は耳が聞こえないので手話通訳を付けてほしい」と要求したとします。でも大学には提供できるだけの手話通訳者がいない。だから対応できないので、ノートテーカーを2人ずつつけるので何とかそれで授業やってもらえないかと大学側が言う。そういう話し合いの中で、「そういうことならそれでいきましょう」と本人が納得して、2人のノートテーカーでやりましょうということで契約成立する。それが調整です。しかし「私は今まで何の支援も受けてこなかったので、大丈夫です。一人でやれます」という人には大学側には何の情報保障の提

供の義務がありません。厳しい時代というのはそういう意味です。

○合理的配慮を教育の中でどう考えるか

私が今金沢大学で障害学生支援室の室長をしています。聴覚障害はいいのですが、発達障害の学生で「自分は大丈夫です」と言う人がいっぱいいます。全然大丈夫ではありません。その時、自己理解を促すために2年も3年もかけて少しずつ事実を整理して自分自身を見つめてもらうということをしてしていますが、聴覚も同じで「大丈夫です」と言っていると合理的配慮の提供は受けられない。だからそのために何が重要かということ、中学部、高等部になった時に自分はこういう風にしてもらったらわかる、こういう風だったらわからないということ自分を理解する。何でもできます頑張りますではなく、自分は音声で言われたらわからないからFMマイクを付けて話してくださいと言う人もいれば、紙に書いてくださいと言う人もいるし、手話通訳を付けてと言う人がいるかもしれない。どうやって自分がわかるかを自分自身で理解して、それを他の人に伝えられる、そういうような力が合理的配慮の時代に求められるということです。

最後にこういう力も求められるということをつけ加えました。これは学校の先生に向けてよく話をするのですが、学校はもちろんいろんなものを学ぶ場ですから昨日よりは今日、今日よりは明日いろんなことを知っていくというところなので、本人ができることを一つでも増やしていくことが学校がすることの第一義です。もちろんその通りですが、それだけではないです。今のようによければ自分はわかるのかできるのか、自分はということが得意でということが苦手なのか、こんな風にしたら自分はわかるんだということをちゃんと相手に伝えられる、そのためにはちゃんと自分自身を理解しなくてはいけない。必要以上に卑下することでもなく、大きく見せることでもない。ちゃんと自分自身を見つめて、できること・できないことを他者に説明できる力、それを学校が扱ってほしい。3つ目は社会にそれをわかってもらう。それは学校だけの仕事ではないですが、聞こえない・聞こえにくい子どもたちがこうすればわかってもらえますよとか、手話というのはこんなに魅力的な言葉ですよ、手話はこんなところで学ぶことができますよということを社会に発信していくことも学校の仕事かと思えます。その意味ではこの場、こめっこに参加しているお子さん、保護者の方が一義的な利益を得るわけですが、ここでの実践を社会に発信していくことで、社会が手話や聞こえない・聞こえにくいことの理解につながると思えます。

これでいったん話を終えて、質疑があれば受けたいと思います。

A /

公立小学校で言語障害通級を担当しています。

直接、難聴や手話でコミュニケーションをとって子どもさんに関わっているわけではありませんが、先ほどの学校側が合理的配慮を受けられるように先生たちに啓発をする仕事を

しています。その中でよく先生方から相談を受けるのは、例えば保護者、お医者さんから意見書があって、このような合理的配慮をお願いしたいと、その中にはロジャーシステムの使用を配慮いただけないかというものもあり、もちろん学校も教育委員会も可能な限り対応したいということですが、最終段階になって本人が「これはやめてくれ」ということになって、そういう時にどうしたら本人にとって有効だとわかるか。お家の方や学校の先生からかける言葉があれば教えてほしいです。

武居／

ありがとうございます。とても難しい質問です。これという答えがあるわけでもないし、これという特効薬があるわけではありませんが、先生が悩まれていることは私が障害学生支援室で日々格闘していることと同じです。結局、時間をかけて話をするしかないだろうと思います。本人が自分はいらぬ大丈夫だと、大丈夫でなくても大丈夫だというだけの何か背後があると思います。まずは関係性を作って、そこをうまく引き出していくことで自分を見つめていく、1か月2か月で結論を出そうというのではなく、今年はダメだったから来年またという長いスパンで話をしていくことが重要かと思います。発達障害の例ですが、最初は、おれは誰の支援も受けないという学生がいて、でも言動は本当に大変でわからないテストはぐちゃぐちゃにして自分の答案をびりびり破いて出ていくとか、その問題を作った先生の研究室のドアをバシバシ蹴っている様子が見られたり、本当に大変だったのです。支援室からはこういうこともできますよと言うのですが、大丈夫ですと。でも単位が取れないわけです。ディスカッションの場面もうまくいかない。そうすると困る場面が出てくるわけです。困る場面が出てきたときに、「もしもこういう書類を作ってくれたら支援室はこういう形で対応できるよ。例えばディスカッションが苦手ならレポートに変えて評価してもらうようお願いを指導教員にすることができるようよ。でも自分は何も支援がいないと言うならこの中で評価するからまた落ちるかもしれない。」と厳しいようだけど大学生だから2択を突き付けます。最初はいらぬ、いらぬだったのが、単位が取れなくなってせっぱつまって受けるということになり、それで書類を作ってということになり、自分はどんなふうにしたらわかるか、という話をその後になります。そうするとだんだん自分を認識できるようになるので、最終的に彼は診断名も最終的に出たので普通に就職というのも難しいと思ったので、精神の手帳をとって就労移行支援から就職につながるという、そこまで自己理解ができるようになりました。やはり時間をかけるということがすごく大切かと思います。

河崎／

ありがとうございました。本当に考えさせられることが多いです。小中学校の子どもさんは支援を受けるのが嫌なのではなくて、みんなにどう思われるかが嫌だということが多いので、この情報保障について先生たちも知らないからまず個別にやってみようと、これ使えるなあとわかった上で、みんなにどう説明するかを一緒に相談して、その上でみんなのいるところで実践するという手順が要るように思います。まずは個別からというのは、

どう見られているかというのを気にしているのかもしれませんが。ありがとうございました。

B／

療育施設で仕事をしています。

先生のお話の中で手話が子どもたちのアイデンティティに大きく作用するという事に本当に賛成の立場で伺いたいと思います。デフファミリーで1歳児で絵カードを見せて「ひよこかわいいね」と言ったら、「しょうもない」という表現を出しました。すごい言語力だなと思ったのですが、それはデフファミリーでいつも手話で話をされているから1歳でそのような返しができるのだなと思うのですが、健聴のおとうさん・おかあさんの子どもさんでは、「かわいい」と言ったら「かわいい」とリピートするのが精いっぱいだと思います。子どもたちが手話を覚えることが大事とおっしゃったのですが、実際どうやって聞こえるおとうさん・おかあさんのご家庭に生まれたお子さんが手話を覚えていくのか、どういう方法が早いのか、こういう集まりが大事だと思うのですが、こういう集まりだけではやはり手話は覚えていけないので、その辺りの方法を教えていただきたいなと思います。

武居／

ありがとうございます。今、ご質問いただいた内容はよく受けます。聞こえない・聞こえにくいお子さんの多くは聞こえるお父さん・お母さんから生まれてくるわけで、初めて手話を覚えますという方が多いです。ただ私はその意味では非常に楽観的です。それはおとうさん・おかあさんだけが子どもに手話環境を提供するわけではなく、まさにこの場ですが、子どもたち同士が会う場というのが保障されていたら手話力はぐんぐんと上がります。それは私も石川で変化していく子どもたちを見てきました。3歳の時は先生の方が手話ができるが、4歳になると先生と同じくらいになり対等に話ができます。5歳になると子どもが先生の手話を「それ違う」と言って先生の手話を修正したりとか、「手話が下手だ」と子どもに言われちゃった先生がいたり、子どもの方が手話力が上がっていきます。なぜなら先生やお母さん、お父さんは第二言語として手話を学んでいるわけです。でも子どもは第一言語として手話を学んでいます。言語学の英語用語でクレオール化と言いますが、第一言語で身に着けるときは私たちが第二言語として覚えるよりはるかに速いスピードでどんどん手話が膨らんでいきます。親や先生が使っていない手話を使い出したりする。だから今のご質問にお答えするとしたら聞こえない同年齢集団、手話を共有する仲間たちがいる場というのを保障するのが第一かと思います。そこに加えてまわりのお父さん・お母さんが手話で子どもとキャッチボールするために覚えていくのです。お父さん・お母さんが手話を覚えるには、まさに僕はみんなの手話で考えたことと全く同じですが、第二言語として覚える場合は、理屈があった方が覚えられると思います。理屈から入って手話を覚える方が覚えやすいと思います。例えば文法など手話の構造を知ったうえで覚えていく。実際に石川でも先ほどの12人の集団ともう少し下のお母さんの何人かはそこから10年くらいして石川県の登録手話通訳者になっています。その人たちは自分の子どもが聞こえていたら手話に出会わなかったので、こういう素敵な言葉に出会えて息子に感謝している

とおっしゃっています。

河崎／

理屈でというところに私もすごく共感します。手話ろうタイム10の時になぜ私が出てきているかというの、実はそこです。子どもたちはろうのアキさん、ユタカさんを見てそのまま手話を理屈ではなく吸収して使いますが、おとうさん・おかあさんは少し理屈が欲しい。そのあたりを理屈解説で私がしゃべらせてもらっているということがあるので、よかったですと思いました。

C／

難聴学級で介助員をしています。

難聴学級に入ってくる子どもたちの変化というか、発達障害の子どもたちや人工内耳の子どもさんなどが増えてきて、以前は通常学級に入り込みをしてもそのお子さんの情報保障でついていたのですが、今はそれよりも周りの先生に聞こえのこととか、こうすればやりやすいとか理解をしていただくことが増えていると思います。聴力が軽くなっている子どもたちに対して何か見過ごしているなど日々思うことがあるのですが、そのあたりで何かお話をいただければと思います。

武居／

ありがとうございます。中等度難聴や人工内耳を上手に使っている子たちって年齢相応のおしゃべりが発音も明瞭で、3歳4歳5歳でできるようになります。しかしこの子たちの山は3歳4歳5歳にあるのではなく小学校2年生にあると思います。つまり、日常的な話ができるかもしれないが、例えば分数の割り算は、割る数の分母と分子を入れ替えて、分母同士分子同士掛け算するとできますよ、みたいな話になると何のことでしょうということになります。でも普通にやり取りができるので担任の先生、お母さんが見過ごしてしまいます。そして、気が付くのは小学校5、6、下手したら中3でどこの高校受かるのかしら、学力見たら小学3年生で止まっているというような状況が少なくありません。一方で聴力の厳しい子は、先生やお母さんが「この子わかっているのかな」とすごく注意してみるので、つまずきの発見がすごく早いです。早ければそこで介入ができるのでそんなに大きなつまずきになりません。聴力の軽い子は小学校2年生くらいに山があります。1つは日本語の文法的理解の足りなさ、もう一つはわかる経験の足りなさです。ぽや一とわかる程度でそこまで来ちゃっている。この2つが大きな要因になってくるので、そこをちゃんと確認するのが大切かという気がします。

C／

聴覚障害児が、地域で一人で難聴学級や支援学級にいる場合は、先生方からはできることはしてもらっていますが、武居先生が言われる自己認識ということで、支援の中から聞こ

えないことがたくさんあるとか、そこを乗り越えてしゃべっていくということはなかなかできにくい、でも私たち事業所として対応するものはそれはわかっているけれども、それは私が子どもを抜かして学校に言っちゃうと何にもならないと思います。そこをどのように育てていってあげればいいのか教えていただければ。

武居／

これも1つの答えがあるわけではありませんが、周りの人たちに何を自分がわかってほしいのかというのを、最初はぼやーっとしてはっきり言えないと思いますが、子どもとの話しの中でどんなことをわかってほしいと思っているのか、例えば話すときにゆっくり話してほしいとか、えっという顔をしたときにはもう一回言ってほしいとか、いろいろ話の中に出てくると思います。ある程度出てきたら、それをどんなふうにみんなに伝えたいのか。先生がみんなに話すのか、自分で時間を作ってもらって他のお友だちに話すのか、あるいは聞こえにくさの体験をしてもらうのか、アイデアはいろいろあるので、それを子どもに出していきながら、子どもがこんな風に伝えたい、こんな風にわかってもらいたいというが、難聴学級だったら結構1対1というのが多いので、そうやって周りの子たちにわかってもらい、それを通して自分自身を認識するということに繋がっていくと思います。それも2週間、1か月でこんなことしてほしいとすぐ出てくるものではなく、かなり時間をかけていろんな事件とかトラブルが起こる中でぼつぼつと出てくることを拾いながら長い時間をかけてやっていくことかと思っています。

肝心なことを言うのを忘れていました。

この場はとても大切な場で、もちろん子どもたちの発達を支援する保護者の方に手話を覚えていただく大切な場でもあります、これだけ手話を大切にしている子どもたちが集まって長いスパンで見えていくときには、研究というところでも大切だと思います。ここでの実践をちゃんと研究という視点から定量的にデータを取っていき、何が有効なのかというのを明らかにすることが大切だと思いますので、研究者の立場で私はいろいろ一緒にできるかと思っています。

河崎／

ありがとうございます。「こめっこやめないでね」という声をたくさんいただくようになりました。継続していくためには、どんな意味があるのかということをお社会に伝えていかなければいけないと思います。これからは皆さんの子どもたちが成長していくという姿を、目指すところをもって、ちゃんとデータとして大切に扱って、世の中に示していきたいと思っていますので、ご協力よろしくお願いします。

